

# 源氏物語

総角

紫式部

青空文庫



心をば火の思ひもて焼かましと願ひき

身をば煙にぞする

(晶子)

長い年月馴なれた河風かわかぜの音も、今年の秋は耳騒がしく、悲しみを加重するものとばかり宇治の姫君たちは聞きながら、父宮の御一周忌の仏事の用意をしていた。大体の仕度したくは源中納言と山の御寺てらの阿闍梨あじやりの手でなされてあつて、女王にょおうたちはただ僧たちへ出す法服のこと、経巻の装幀そうていそのほかのこまごまとしたものを、何が必要とするとか、何を必要とするとかいうようなことを周囲の女たちが注意するままに手もとで作らせることしか

できないのであったから、薫かおるのような後援者がついておればこそ、  
これまでに事も運ぶのであるがと思われた。

薫は自身でも出かけて来て、除服後の姫君たちの衣服その他を  
周到にそろえた贈り物をした。その時に阿闍梨も寺から出て来た。  
二人の姫君は名みょうこう香こうの飾りの糸を組んでいる時で、「かくても  
へぬる」（身をうしと思ふに消えぬものなればかくてもへぬるも  
のにぞありける）などと言い尽くせぬ悲しみを語っていたのであ  
るため、結び上げた総あげまき角かく（組み紐の結んだ塊かたまり）の房ふさが御簾みすの端  
から、几帳きちょうのほころびをとおして見えたので、薫はそれとうな  
ずいた。

「自身の涙を玉に貫さそうと言いました伊勢いせもあなたがたと同じよ

うな気持ちだったのでしようね」

こうした文学的なことを薫が言っても、それに応じたようなこととで答えをするのも恥ずかしくて、心のうちでは貫つらゆき之朝臣あそんが「糸に縊よるものならなくに別れ路ぢは心細くも思ほゆるかな」と言い、生きての別れをさえ寂しがつたのではなかつたかななどと考えていた。御み仏ほとけへの願文を文章もんじょう博士はかせに作らせる下書きをした硯すずりのついでに、薫は、

あげまきに長き契りを結びこめ同じところに縊よりも合はなん

と書いて大姫君に見せた。またとうるさく女王は思いながらも、

貫ぬきもあへずもろき涙の玉の緒に長き契りをいかが結ばん

と返しを書いて出した。「逢はずば何を」（片糸をこなたかな  
たに縊りかけて合はずば何を玉の緒にせん）と薫は歎かれるので  
あるが、自身のことを正面から言うことはできずに、洩もらす溜ためい  
息きに代える程度により口へ出しえないのは、姫君のあまりに高  
貴な氣に打たれてしまうことが多いからであつた。それで兵部ひょうぶ  
卿きょうの宮と中の君の縁組みのことを熱心なふうに言い出した。  
「それほど深くお思いになるのでなく好奇心をお働かせになるこ  
とが多くて、お申し込みになったのを、冷淡にお扱われになるた

めに、負けぬ気を出しておいでになるだけではないかと、私は考  
えもしまして、いろいろにして御様子を見ていますが、どうも誠  
心誠意でお始めになった恋愛としか思われません。それをどうし  
てただ今のようなふうにはばかりこちらではお扱いになるのでし  
う。ものの判断がおできにならぬほどの少女ではおられないそうめ聡  
明なあなたの御意見をよく伺いたいと私は思っているのですが、  
いつまでも御相談相手にしてくださいませんのは、私の純粋な信  
頼をおくみいただけけない、恨めしいことだと思つています。可否  
だけでも言つてくださいませんか」

薫はまじめであつた。

「あなたの御親切に感謝しておりますこそ、こんなにまで世

間に例のございませんほどにもお親しくおつきあい申し上げてい  
るのでございます。それがおわかりになりませんのは、あなたの  
ほうに不純な点がおありになるのではないかと疑われます。少女  
でもないとおっしゃいますが、実際こんな寄るべない身の上にな  
ってしましては、ありとあらゆることを普通の人であれば考え尽  
くしていなければなりませんのに、どんなことにも幼稚で、こと  
に今のお話のようなことは、宮が生きておいでになりましたころ  
にも、こんな話があればとかさうであればとか将来の問題として  
ほかの話の中でもおっしゃらなかつたことでしたから、やはり  
宮様のお心は、私たちはただこのままで、他の方のような結婚の  
幸福というようなことは念頭に置かず的一生を過ごすようにとお



考えになつたに違いないとそう思っているものですから、兵部卿の宮様のことにつきましても可否の言葉の出しようがないのでございませう。けれど妹は若くて、こうした山陰やまかげに永久に朽ちさせしてしまうのがあまりに心苦しゅうございましてね、なにも私と同じ道を取らずともよいはずであるとも考えられまして、ほかのほうのことも空想いたしますが、どんな運命が前途にありますことか」

と言つて、物思わしそうに大姫君の歎息をするのが哀れであつた。中の君の結婚談にもせよはつきりと年長者らしく、若い貴女は縁組みの話の賛否を言い切りうるはずはないのである、と同情した薫は、別の所で例の老女の弁を呼び出して、

「以前は宮様を仏道の導きとしてお訪ねたずしていたものですが、お心細くお見えになるようになった御薨こうきよ去前になつて、お二方の将来のことを私の計らいに任せるといふような仰せがあつたのですよ。ところが宮様の御希望あそばしたようにならうとは姫君がたはお思いにならないで、限りなくささげる尊敬と熱情を無視されるのですから、何か別に対象とあそばされる人があるのではないかという疑いとでもいふようなものが私の心に起こつてきましたよ。あなたは世間で言っていることも聞いておいでになるでしょう、変わった性情から私は人間並みに結婚をしようというような考えは全然捨てていたものでした。それが宿命というものなのでしょうか、こちらの姫君に心をお惹ひかれすることになつて、今

ではもう世間の噂うわさにも上っているだろうと思われらるまでになつて  
いるのですから、できることなら宮様の御遺志にもかなう結果を  
生じさせたいと私の思うのは、勝手なことかはしれませんが、だ  
れからも批難をされないでいいことかと思う。例のあることだし  
ね」

と薫は話し続け、また、

「兵部卿の宮様のことも、私がお勧めしている以上は安心して御  
承諾くだすつていいものを、そうでないのはお二方の女王様にそ  
れぞれ別なお望みがあるのではないのですか。あなたからでもよ  
く聞きたいものですよ。ねえ、どんなお望みがあるのだろう」

とも、物思わしそうにして言うのであつた。こんな時によくな

い女房であれば、姫君がたを批難したり、自身の立場を有利にしようとしたり試みるものであるが、弁はそんな女ではなかった。心の中では二人の女王の上にこの縁がそれぞれ成立すればどんなにいいであろうとは思っているのであるが、

「初めからそんなふうにし少し変わった御性格なのでございますか  
らね。どうして、どうしてほかの方を対象にお考えなどなさるものでございますか。女房なども宮様のおいになりました当時と申しても何の頼もしいところのある親王家ではなかったのですから、わが身を犠牲にしますのを喜びません人たちは、それぞれに相当な行く先を作ってお暇をとってまいるのでございましてね。

昔のいろいろな関係で切るにも切られぬ主従の御縁のある人でも、

こんなになれもが出て行ってしまいましたのを見ておりましては、しばらくでも残っているのがいやでならぬふうを見せましてね、そしてまたその人たちは姫君がたに、『宮様の御在世中はお相手によつて尊貴なお家を傷つけるかと御遠慮もあそばしたでしょうが、お心細いお二人きりにおなりになったのですもの、どんな結婚でもなすつたらいいはずです、それをとやかくと言う人はものわからぬ人間だとかえつて軽蔑あそばしたらいいのです、どうしてこんなふうにばかりしておいでになることができますか、松の葉を食べて行をするという坊様たちでさえ、生きんがために都合のよい一派一派を開いていくものでございますから』などと、こないやなことを申しましてね、若い姫君がたのお心を苦しめ

まして利己的に媒介者になろうといたしますが、女王様はそんな浮薄な言葉にお動きになるような方がたではございません。お妹様だけには人並みな幸福を得させたいとお考えになつていらっしゃるようでございます。こうした路みちのたいへんな所へ御訪問をお欠かしあそばさないあなた様の御好意は長い年月の間によくおわかりになつていらつしやることでもございますし、ただ今になりましてはことさらあなた様のあたたかい御庇護ひごのもとにいらつしやるわけでございますからね。大姫君は中の君様をお望みになればとそう希ねがつていらつしやるらしゆうございます。兵部卿の宮様からお手紙は始終おいただきになるのですが、それは誠意のある求婚者だとも認めておられないようでございます」

弁は姫君の意志を伝えようとしただけである。

「宮様の御遺言を身に沁しんで承った私は、生きていくかぎりこちらのお世話を申し上げる義務があると思うのですから、両女王のどなたでもお許しくだされば結婚してもいいわけですが、同じことのように、しかも姫君が中姫君のために私を撰えらんでくださった一つ深く心の惹かれる感じを味わい、また死後までもこの思いは残ろうと思つた方から、ほかの方へ愛を移すことはできるものでありませんよ。改めて心をそう持とうとしても無理なことです。私の望むところは世間並みの恋の成立ではありません。ただ今のようなふうになんか隔てたままでも、何事に限らず話し合う相手

にいつまでもなっていていただきただけです。私には姉きょうだい妹

などでそうした間柄になりうるような人もなくて寂しいのですよ。人生の身にしむ点も、おもしろいことも、困ることも、その時その時ただ一人で感じているだけであるのが物足りないのです。中ちゆうぐう

宮 はあまりに御身分が高過ぎて、なれなれしく私の思うとおりのことを何から何まで申し上げられないし、三条の宮様は母とも思われぬ若々しいお気持ちの方ではありまして、子は子の分があつて、どんな話も申し上げるといふわけにはゆきません。そのほかの女性というものはすべて皆私には遠い遠い所にいるとしか考えられませんで、私にいつも孤独の感を覚えています。心細いのですよ。その場かぎりの戯れ事でも恋愛に関したことはまぶ



しい気がして、人から見れば見苦しい頑固がんこな男になっているので  
す。まして深く恋しく思う方にはそれをお話しすることも困難な  
ことに思われます。恨めしく思ったり、悲しんだりしている恋の  
悶もだえもお知らせすることができなくて、われながら変わった生ま  
れつきが憎まれます。兵部卿ひょうぶきょうの宮のことも私がお受け合います  
る以上は不安もなかりうと思つて任せてくださつてよさそうなの  
のですがね」

こんなことを薫かおるは言つていた。老いた弁もまたこの心細い身の  
上の姫君たちに上もない二つの縁が成立するようには切に願う  
ところであつたが、二女にょお王ともに天性の気品の高さに、自身の  
思うことのすべてが言われなかつた。

薫は今夜を泊まることにして姫君とのどかに話がしたいと思う心から、その日を何するとなく山川をながめ暮らした。この人の態度が不鮮明になり、何かにつけて怨み<sup>うら</sup>がましくものを言う近ごろの様子に、煩わしさを覚え出した姫君は、親しく語り合うことがいよいよ苦しいのであつたが、その他の点では世にもまれな誠意をこの一家のために見せる薫であつたから、冷ややかには扱いかねて、その夜も話の相手をする承諾はしたのであつた。

仏間と客室の間の戸をあけさせ、奥のほうの仏前には灯を明るくともし、隣との仕切りには御簾<sup>みす</sup>へ屏風<sup>びょうぶ</sup>を添えて姫君は出ていた。客の座にも灯の台は運ばれたのであるが、  
「少し疲れていて失礼な恰<sup>かつこう</sup>好<sup>こう</sup>をしていますから」

と言ひ、それをやめさせて薫は身を横たえていた。菓子などが客の夕餐ゆうげに代えて供えられてあつた。従者にも食事が出してあつた。廊の座敷にあたるような部屋へやにその人たちは集められていて、こちらを静かにさせておき、客は女王と話をかわしていた。打ち解けた様子はないながらになつかしく愛あい嬌きようの添ったふうでものを言う女王があくまでも恋しくてあせり立つ心を薫はみずから感じていた。この何でもないものを越えがたい障害物のようになして恋人に接近なしえない心弱さは愚かしくさえ自分を見せているのではないかと、こんなことを心中では思うのであるが、素知らぬふうを作つて、世間にあつたことについて、身にしむ話もおもしろく聞かされることもいろいろと語り続ける中納言であつ

た。女王は女房たちに近い所を離れずいるように命じておいたの  
であるが、今夜の客は交渉をどう進ませようと思つてゐるか計ら  
れないところがあるように思う心から、姫君をさまで護ろうとは  
していず、遠くへ退いていて、御みほとけ仏の灯ひもかかげに出る者はな  
かつた。姫君は恐ろしい気がしてそつと女房を呼んだがだれも出  
て来る様子がない。

「何ですか気分がよろしくなくなつて困りますから、少し休みま  
して、夜明け方にまたお話を承りましょう」

と、今や奥へはいろいろとする様子が姫君に見えた。

「遠く山やまみち路を来ました者はあなた以上に身体からだが悩ましいのです  
が、話を聞いていただくことができ、また承ることの喜びに慰ん

でこうしておりますのに、私だけをお置きになってあちらへおいでになつては心細いではありませんか」

薫はこう言つて屏風びょうぶを押しあけてこちらの室へやへ身体からだをすべり入らせた。恐ろしくて向こうの室へもう半分の身を行かせていたのを、薫に引きとめられたのが非常に残念で、

「隔てなくいたしますというのはこんなことを申すのでしうか。奇怪なことではございませんか」

と批難の言葉を発するのがいよいよ魅力を薫に覚えしめた。

「隔てないというお気持ちがあつても見えないあなたに、よくわかつていただこうと思うからです。奇怪であるとは、私が無礼なことでもするとお思いになるのではありませんか。仏のお前でどん

な誓言でも私は立てます。決してあなたのお気持ち破るような行為には出まいと初めから私は思っているのですから、お恐れになることはありませんよ。私がこんなに正直におとなしくしておそばにすることはだれも想像しないことでしょうが、私はこれだけで満足して夜を明かします」

こう言つて、薫は感じのいいほどな灯ひのあかりで姫君のこぼれかかった黒髪を手で払つてやりながら見た顔は、想像していたように艶麗えんれいであつた。何の嚴重な締まりもないこの山莊へ、自分のような自己を抑制する意志のない男が闖ちんにゆう入したとすれば、このままで置くはずもなく、たやすくそうした人の妻にこの人になり終わるところであつた、どうして今までそれを不安とせず

結婚を急ごうとはしなかつたかとみずからを批難する気にもなつてゐる薫であつたが、言いようもなく情けながつて泣いてゐる女王が可憐かれんで、これ以上の何の行為もできない。こんなふうの接近のしかたでなく、自然に許される日もあるであらうとのちの日の思い、男性の力で恋を得ようとはせず、初めの心は隠して相手を上手じょうずになだめていた。

「こんな心を突然お起こしになる方とも知らず、並みに過ぎて親しく今までおつきあいをしておりました。喪の姿などをあらわに御覧になろうとなさいましたあなたのお心の思いやりなさもわかりましたし、また私の抵抗の役だたなさも思われまして悲しくなりません」

と恨みを言つて、姫君は他人に見られる用意の何一つなかつた自身の喪服姿を灯影ほかげで見られるのが非常にきまり悪く思うふうで泣いていた。

「そんなにもお悲しみになるのは、私がお氣に入らないからだと恥じられて、なんともお慰めのいたしようがありません。喪服を召していらつしやる場合ということで私をお叱りしかなさいますのはごもつともですが、私があなただけをお慕い申し上げるようになります。してからの年月の長さを思つただけ、今始めたことのように、それにかかわつていなくともよいわけでなからうかと思ひます。あなたが私の近づくのを拒否される理由としてお言いになつたことは、かえつて私の長い間持ち続けてきた熱情を回顧させる



結果しか見せませんよ」

薫はそれに続いてあの琵琶びわと琴の合奏されていた夜の有明月ありあけづきに隙見すきみをした時のことを言い、それからあのちのいろいろな場合に恋しい心のおさえがたいものになっていったことなどを多くの言葉で語った。姫君は聞きながら、そんなことがあったかと昔の秋の夜明けのことに堪えられぬ羞しゆうち恥ちを覚え、そうした心を下に秘めて長い年月の間表面うわべをあくまでも冷静に作っていたのであるかと、身にしみ入る気もするのであった。薫はその横にあった短い帳きちようで御仏のほうとの隔てを作つて、仮に隣へ寄り添つて寝ていた。名香が高くにおい、櫛しきみの香も室に満ちている所であったから、だれよりも求道心ぐどうの深い薫にとつては不浄な思いは現わすべ

くもなく、また墨染めの喪服姿の恋人にしいてほしいままな力を加えることはのちに世の中へ聞こえて浅薄な男と見られることになり、自分の至上とするこの恋を踏みにじることになるであろうから、服喪の期が過ぎるのを待とう。そうしてまたこの人の心も少し自分のほうへなびく形になつた時にと、しいて心をゆるやかにすることを努めた。秋の夜というものは、こうした山の家でなくて身にしむものが多いものであるのに、まして峰の嵐あらしも、庭に鳴く虫の声も絶え間なくてここは心細さを覚えさせるものに満ちていた。人生のはかなさを話題にして語る薫の言葉に時々答えて言う姫君の言葉は皆美しく感じのよいものであつた。

宵よいを早くから眠っていた女房たちは、この話し声から悪い想像

を描いて皆部屋へやのほうへ行つてしまった。召使は信じがたいものであると父宮の言つてお置きになつたことも女王は思い出し、て、親の保護がなくなれば女も男も自分らを軽侮して、すでにもう今夜のような目にあつてゐるのではないかと悲しみ、宇治の河かわお音ととともに多くの涙が流れるのであつた。そして明け方になつた。薫の従者はもう起き出して、主人に歸りを促すらしい作り咳せきの音を立て、幾つの馬のいななきの声の聞こえるのを、薫は人の話に聞いている旅宿の朝に思い比べて興を覚えていた。

薫は明りのさしてくるのが見えたほうの襖からかみ子こをあけて、身にしむ秋の空を二人でながめようとした。女王も少しいぎつて出た。軒も狭い山莊作りの家であつたから、忍ぶ草の葉の露も次第に多

く光つていく。室の中もそれに準じて白んでいくのである。二人とも艶えんな容姿の男女であつた。

「同じほどの友情を持ち合つて、こんなふういつまでも月花に慰められながら、はかない人生を送りたいのですよ」

薫がなつかしいふうになんなことをささやくのを聞いていて、女王はようやく恐怖から放たれた気もするのであつた。

「こんなにあからさまにしてお目にかかるのではなく、何かを隔ててお話をし合うのでしたら、私はもう少しも隔てなどを残しておかない心でおります」

と女は言った。外は明るくなりきつて、幾種類もの川べの鳥が目をさまして飛び立つ羽音も近くでする。黎明れいめいの鐘の音がかす

かに響いてきた、この時刻ですらこうしてあらわな所に出ているのが女は恥ずかしいものであるのにと女王は苦しく思うふうであった。

「私が恋の成功者のように朝早くは出かけられないではありませんか。かえつてまた他人はそんなことからよけいな想像をするだろうと思われますよ。ただこれまでどおり普通に私をお扱いくださるのがいいのですよ。そして世間のととは内容の違った夫婦とお思いくだすつて、今後もこの程度の接近を許しておいてください。あなたに礼を失うような真似まねは決してする男でないと私を信じていてください。これほどに譲歩してもなおこの恋を護まもろうとする男に同情のないあなたが恨めしくなるではありませんか」

こんなことを言っていて、薫はなおすぐに出て行こうとはしない。それは非常に見苦しいことだと姫君はしていて、

「これからは今あなたがお言いになったとおりにもいたしましょう。今朝けさだけは私の申すことをお聞き入れになってくださいませ」と言う。いかにも心を苦しめているのが見える。

「私も苦しんでいるのですよ。朝の別れというものをまだ経験しない私は、昔の歌のように帰り路みちに頭がぼうとしてしまう気がするのですよ」

かおる薫が幾度もたんそく歎息をもらしている時に、鶏もどちらかのほうで遠声ではあるが幾度も鳴いた。京のような気がふと薫にした。

山里の哀れ知らるる声々にとりあつめたる朝ぼらけかな

姫君はそれに答えて、

鳥の音も聞こえぬ山と思ひしをよにうきことはたづねきけり

と言つた。姫君の居間の襖からかみ子の口まで送つて行つた。そして中の間を昨夜ゆうべはいつた戸口から客室のほうへ出て薫は横になつたが、もとより眠りは得られない。別れて来た人が恋しくて、こんなにも思われるなら今まで気長な態度がとれなかつたはずである

とも歎かれて、京へ帰る気もしないのであった。

姫君は人がどんな想像をしているかと思うのが恥ずかしくて、すぐにも枕まくらへつくことはできなかつた。いろいろな思いが女王の胸にわく。親のない娘の心細さにつけこむような女房の取り次いでくる幾件かの縁談、その青年たちが今一步思いやりのないことを進めた時に、自分はどうなるであろうと、心にもなく、人の妻になつてしまう運命が自分を待っているのであると、いろいろにも考え合わせてみれば、薫は良人おととして飽き足らぬところはなく、父宮も先方にその希望があればと、そんなことを時々お洩もらしになつたようであつた。けれども自分はやはり独身で通そう、自分よりも若く、盛りの美貌びぼうを持つていて、この境遇に似合わし



くなく、いたましく見える中の君に薫を譲つて、人並みな結婚をさせることができればうれしいことであろう、自分のことでなくなれば力の及ぶかぎりの世話を結婚する中の君のためにすることができよう、自分が結婚するのではだれがそうした役を勤めてくれよう、親もない、姉もない。薫が今少し平凡な男であれば、長く持ち続けられた好意に対してむくいるために、妻になる気が起きたかもしれない。けれどあの人はそうでない、あまりにすぐれた男である、気品が高く近づきにくいふうもあるではないか、自分には不似合いに思われてならぬ、自分は今までどおりの寂しい運命のまま一人でいようと、思い続けて朝まで泣いていたあとの身体からだのぐあいがよろしくなくて、中姫君の寝ている帳台の奥のほう

へはいって横になった。

昨夜は平常とは変わっておそくまで話し声がするのを怪しく思  
いながら、中の君は寝入ったのであったから、大姫君のこうして  
来たのがうれしくて、夜着を姉の上へ掛けようとした時に、高い  
においがくゆりかかるように立つのを知った。あの宿直とのいの侍が衣  
服をもらって、困りきった薫のにおいであることが思い合わされ  
て、男の熱情と力に姉君が負けたというようなこともあったであ  
ろうかと気の毒で、それからまたよく眠りに入つたようにして何  
も言わなかつた。

薫は朝になつてからまた老女の弁あに逢あいたいと呼び出して、昨き  
日も話のうした自身の気持ちをこまごまとまた語つて行き、そして姫

君へは礼儀的な挨拶あいさつを言い入れて帰った。

昨日は総角あげまきを言葉のくさびにして歌を贈答したりしていたが、  
 催馬楽歌さいばらうたの「尋ひろばかり隔ひらてて寝たれどかよりあひにけり」という  
 ようなあやまちをその人としてしまったように妹も思うことであ  
 ろうと恥はずかしくて、気分が悪いということにして大姫君はずつ  
 と床を離れずにいた。女房たちは、

「もう御仏事までに日がいくらもなくりましたのに、そのほか  
 には小さいこともはかばかしくできる人もない時のあやくな姫  
 君の御病気ですね」

などと言っていた。組紐くみじゆが皆出来そろつてから、中の君が来て、  
 「飾りの房ふさは私にどうしてよいかわからないのですよ」

と訴えるのを聞いて、もうその時にあたりも暗くなっていたのに紛らして、姫君は起きていつしよに紐結びを作りなどした。

源中納言からの手紙の来た時、

「今朝けさから身体からだを悪くしておりますから」

と取り次ぎに言わせて、返事を出さなかつたのを、あまりに苦々しい態度だと譏そしる女たちもあつた。

喪の期が過ぎて除服をするにつけても、片時も父君のあとには生き残る命と思わなかつたものが、こうまで月日を重ねてきたかと、これさえ薄命の中に数えて二人の女によおう王の泣いているのも気の毒であつた。一か年真まつくろ黒な服を着ていた麗人たちの薄うす鈍にび色いろに変わったのも艶えんに見えた。姉君の思っているように、中の君は

美しい盛りの姿と見えて、喪の間にまたひとときわ立ちまされたようにも思われる。髪を洗わせなどした中の君の姿を大姫君はながめていられるだけで人生の悲しみも皆忘れてしまう気がするほどな麗容だった。姫君はすべて思うとおりの気がして、結婚して良人おととに幻滅を覚えさせることはよもあるまいと頼もしくうれしくて、自身のほかには保護者のない妹君を親心になつて大事がる姉女王であつた。

薫はいくぶんの遠慮がされた恋人の喪服ももう脱がれた時と思つて、結婚の初めには不吉として人のきらう九月ではあつたが、待ちきれぬ心でまた宇治へ行つた。これまでのようにして話し合いたいと取り次ぎの女は薫の意を伝えて来るのであつたが、

「不注意からまた病をしまして苦しんでいる際ですから」

というような返事ばかりを言わせて大姫君は会おうとしなかつた。

存外にあなたは人情味に欠けた方です。女房たちが私をどう見ていることでしょうか。

と今度は文に書いて薫がよこした。

父の喪服を脱ぎました際の悲しみがずっと続きまして、かえつて今のほうが深い暗さの中に沈んでおります私ですから、お話を承ることができません。

返事はこう書いて出された。しかたのない気のする薫は、例のように弁を呼び出して、この人の力を借ろうと相談した。心細い

この山荘にいて源中納言だけを唯一の庇護者ひごしやと信じてたよる心のある女房たちは、弁からの話を聞いて、この結婚を成立させることほどよいことはないと言われ、どんなにしても姫君の寝室へ薫を導こうと手はずを決めていた。

姫君は女房たちがどんなことを計画しているかを深くは知らないのであるが、弁を特別な者にしてなつけている薫であるから、自分として油断のできぬ考えをしているかもしれぬ、昔の小説の中の姫君なども、自身の意志から恋の過失をしてしまうのは少ないのである、他の女房と質は違っても、弁には弁の利己心が働くはずであるからと、なんとなく今日の家の中の空気のただならぬのよつて思い寄るところがあつた。薫がしいて近づいて来た時

には妹を自分の代わりに与えよう、目的としたものに劣っていたところで、そうして縁の結ばれた以上は軽率に捨ててしまうような性格の薫ではないのだから、ましてほのかにでも顔を見れば多大な慰めを感じるに価する妹ではないか、こんなことは話として持ち出しても、眼前に目的を変えて見せる人があるはずはない、この間から弁に言わせてもいるが、初めの志に違うなどと言って聞き入れるふうがないというのは、自分に対して今まで言っていたことが、こんなに根底の浅いものであつたかと思わせることを避けているにすぎまい、とこう考えを決める姫君であつたが、少しそのことを中の君に知らせておかないでその計らいをするのは仏法の罪を作ることではあるまいかと、先夜の闖入者に苦しんだ



経験から妹の女王がかわいそうになり、ほかの話をした続きに、  
「お亡<sup>な</sup>くなりになつたお父様のお言葉は、たとえばこうした心細い  
生活でも、それを続けて行かねばならぬとして、浮薄な恋愛を、  
感情の動くままにして、世間の物笑いになるなどということでした  
ね。一生お父様の信仰生活へおはいりになるお妨げをしてきたそ  
の罪だけでもたいへんなのだから、せめて終わりの御訓戒にそむ  
きたくないと私は思つて、独身でいるのを心細いなどと考えない  
のですがね、女房たちまでむやみに気の強い女のように言つて悪  
く見ているのは困つたものですわね。まあそう変わった人間に思  
われていてもいいとして、私のあなたと暮らしている月日があな  
たの青春をむだにしてしまうのではないかと、私はそれが始終惜

しく思われてならないのですよ。氣の毒でかわいそうでね。だからあなただけは普通の女らしく結婚をして、あなたの幸福を見ることで私も慰められるようになりたい気がします」

と言うと、どんな考えがあつて姉君はこんなことを言い出したのであろうと急に情けなく中の君はなつて、

「あなたお一人だけにお残しになつた御訓戒だったのでしようか。あなたほど聡明そうめいでない私のほうをことに気がかりにお父様は思召してのお言葉かと私は思っています。心細さはこうしていつもごいっしょにいることだけで慰めるほかに何かあるでしょう」

少し恨めしがらふうちに中の君の言うのが道理に思われて姫君はかわいそうに見た。

「いいえね、女房たちが私らを頑固過がんこぎる女だと言ひもし、思ひもしているらしいから、いろいろとほかの道のことも考えたのですよ」

あとはこんなふうにだけより言わなかつた。日は暮れていくが京の客は帰ろうとしない。姫君は困つたことであると思つていた。弁が来て薫の言葉を伝えてから、あの人の恨むのが道理であると言葉を尽くして言うのに対して、答へもせず、歎息をしている姫君は、どうすればよい自分なのであろう、父宮さえおいでになれば、何となるにもせよ、だれの妻になるにもせよ、娘として取り扱われて、宿命というものがある人生であつてみれば、自身の意志でなくとも人の妻になることもあろうし、結婚生活が不幸なこ

とになつても、親に選ばれた良人おととであるからと、そう恥を思わずにも済むであろう、周囲にいる女房は皆年を取つていて、賢げな顔をしては自身の頼まれた男との縁組みだけが最上のことのように言つて勧めに来るが、そんなことがどうしてよかろう、彼女らの見る世界は狭く、その判断力は信じられないと思つている姫君は、その人たちが力で引き動かそうとせんばかりにして言うことも、いやなこととより聞かれず心の動くことはないのである。どんなことも話し合う妹の女王はこうした結婚とか恋愛とかいうことについては姫君よりもいつそう関心を持たぬようであつたから、圧迫を感じる近ごろの話をして、そう深く苦しい心境に立ち入つては来てくれないのであつたから、姫君は一人で歎くほかはな

かつた。室へやの奥のほうに向こうを向いてすわっている女王の後ろでは薄うす鈍にびでない他のお召し物に姫君をお着かえさせるようにとか女房らが言っていて、だれもが今夜で結婚が成立するもののようにして、こそこそその用意をするらしいのを、姫君はあさましく思っていた。皆が心を合わせてすれば、狭い山荘の内で隠れている所もないのである。

薫はこんなふうにだれもが騒ぎ立てることを願っていない、そうした者を介在させずにいつから始まったことともなく恋の成立していくのを以前から望んでいたのであつて、姫君の心が自分へ傾くことのない間はこのままの関係でよいとも思っているのであるが、老女の弁が自身だけでは足らぬように思つて、他の女たちに

助力を求めたために、あらわにだれもが私語することになったのである。多少洗練されたところはあつても、もともとあさはかな女であるにすぎぬ弁が、その上老いて頭の働किが鈍くなつていゝせいであろう。不快に思つていた姫君は、弁の出て来た時に、

「お亡かくれになりました宮様も、珍しい同情をお寄せくださる方だと始終喜んでばかりおいでになりましたし、今になつては何でも皆御親切におすがりするほかもない私たちで、例もないようなお親しみをもつて御交際をしてまいりましたが、意外なお望みがまじつていまして、あなた様はお恨みになり、私は失望をいたすことになりました。人間としてはなやかな幸福を得たいと願う身でございましたら、あなた様の御好意に決しておそむきなどはいた

されません。しかし、私は昔から現世のことに執着を持たぬ女だ  
ものですから、お言いくださいますことはただ苦しいばかりにし  
か承れないのでございます。それで思いますのは妹のことでござ  
います。むなしくその人に青春を過ぎさせてしまうのが私として  
忍ばれないことに思われます。この山荘の生活も、あなた様の御  
好意だけで続けていかれる現状なのですから、父を御追慕してく  
ださいますお志がございましたら、妹を私に代えてお愛してくださ  
いませ。身は身として、心は皆妹のために与えていくつもりでござ  
いますとね。この意味をもつとあなたが敷衍ふえんして申し上げたら  
いいでしょう」

と、恥じながらも要領よく姫君は言った。弁は同情を禁じがた

く思った。

「あなた様のそういう思召おぼしめしは私にもわかつているものでござ

いますから、骨を折りまして、そうなりますようにと申し上げる

のですが、どうしても自分の心をほかへ移すことはできない、中

姫君と自分が結婚をすれば、兵部卿ひょうぶぎょうの宮様のお恨みも負うこと

になる、そちらの御縁組が成り立てばまた自分は中姫君に十分の

お世話を申し上げるつもりだとおっしゃるのでございます。それ

もけっこうなお話なのでございますから、お二方ともそうした良

縁をお得になりました、まれな御誠意をもって奥様がたをあの貴

公子様がたが御大切にあそばす時のごりっぱさは世間に類のない

ものになりますでございましょう。失礼な言葉ですが、こんなふ



うに不十分なお暮らしをあそばすのを拝見しておりますと、どうおなりになるのかと、私どもは不安で、悲しくてなりませんのにお一方様のお心持ちはまだ私はわかっておりませんでございませが、ともかくも最も高いお身分の方でいらつしやいます。宮様の御遺言どおりにしたいと思召すのはごもつともですが、それは似合わしからぬ人が求婚者として現われてまいらぬかと、その場合を御心配あそばして仰せになりましたことで、中納言様にどちらかの女王様をお娶りめとになるお心があったなら、そのお一人の縁故で今一人の女王様のことも安心ができてどんなにうれしいだろうと、おりおり私どもへお話しあそばしたことがあるのでございませすよ。どんな貴い御身分の方でも親御様にお死に別れになつた

あとでは、思いも寄らぬつまらぬ人と夫婦になっておしまいになるというような結果を見ますのさえたくさんに例のあることでございまして、それはしかたのないこととして、だれも噂うわさにかけはいたしません。ましてこんな理想的と申しましようか、作り事ほどに何もかものおそろいになった方で、そして御愛情が深くて、誠心誠意御結婚を望んでおいでになる方がおありになりますのに、しいてそれを冷ややかにお扱いになりました、御遺言だからと申して、仏の道へおはいりになるようなことをなさいましても、仙せ人んにんのように雲や霞かすみを召し上がって生きて行くことはできるでございまいしょうか」

とも能弁に言い続ける老女を憎いように思い、姫君はうつぶし

になつて泣いていた。中の君もわけはわからぬながら姉君の様子を気の毒に思つてながめていた。そしていつしよに常の夜のように寢室へはいつた。

薫が客となつて泊まっている今夜であることを姫君は思うと気がかりで、どういう処置を取ろうかと考えられるのであつたが、特に四方の戸をしめきつてこもつておられるような所もない山荘なのであるから、中の君の上に柔らかな地質の美しい夜着を被<sup>か</sup>け、まだ暑さもまつたく去つていゝという時候でもないのであるから、少し自身は離れて寝についた。

弁は姫君の言つたことを薫に伝えた。どうしてそんなに結婚がいとわしくばかり思われるのであろう、聖僧のようでおありにな

つた父宮の感化がしからしめるのかと、人生の無常さを深く悟っている心は、自分の内にも共通なものが見いだせる薫には、それが感じ悪くは思われない。

「ではもう物越しでお話をし合うことも今夜はしたくないという気におなりになったのだね。最後のこととして今夜だけでいいから御寢室へ私をそつと導いて行つてください」

と中納言は言った。老女はその頼み事をよく運ばせようとして、他の女房たちを皆早く寝させてしまい、計画を知らせてある人たちとともに油断なく時の来るのを待つていた。荒い風が吹き出して簡単な薨しとみど戸などはひしひしと折れそうな音をたてているのに紛れて人が忍び寄る音などは姫君の気づくところとなるまいと女

房らは思い、静かに薫を導いて行つた。二人の女王の同じ帳台に寝ている点を不安に思つたのであるが、これが毎夜の習慣であつたから、今夜だけを別室に一人一人では初めから姫君に言いかねたのである。二人のどちらがどれとは薫にわかつているはずであるからと弁は思つていた。

物思いに眠りえない姫君はこのかすかな足音の聞こえて来た時、静かに起きて帳台を出た。それは非常に迅速に行なわれたことであつた。無心によく眠入ねつていた中の君を思うと、胸が鳴つて、なんとという残酷なことをしようとする自分であろう、起こして貰もらひたいと願つた。つしよに隠れようかともいつたんは躊躇ちゆうちよしたが、思いながらもそれは実行できずに、慄ふるえながら帳台のほうを見ると、ほのか

に灯ひの光を浴びながら、桂姿うちぎで、さも来馴なれた所だというようにして、帳とばりの垂れ布たを引き上げて薫かほははいつて行つた。非常に妹がかわいそうで、さめて妹はどんな気がすることであろうと悲しみながら、ちよつと壁の面に添ひつて屏風びやうぶの立てられてあつた後ろへ姫君ははいつてしまった。ただ抽象的な話として言つてみた時でさえ、自分の考え方を恨めしいふうに言つた人であるから、ましてこんなことを謀はかつた自分はうとましい姉だと思われ、憎くさえ思われることであろうと、思い続けるにつけても、だれも頼みになる身内の者を持たない不幸が、この悲しみをさせるのであると思われ、あの最後に山の御寺みでらへおいでになつた時、父宮をお見送りしたのが今のように思われて、堪えられぬまで父君を恋し

く思う姫君であつた。

薫は帳台の中に寝ていたのは一人であつたことを知つて、これは弁の計つておいたことと見てうれしく、心はときめいてくるのであつたが、そのうちその人でないことがわかつた。よく似てはいたが、美しく可憐かれんな点はこの人がまさっているかと思へた。驚いている顔を見て、この人は何も知らずにいたのであろうと思われるのが哀れであつたし、また思つてみれば隠れてしまつた恋人も情けなく恨めしかつたから、これもまた他の人に渡しがたい愛着は覚えながらも、やはり最初の恋をもり立ててゆく障害になることは行ないたくない。そのようにたやすく相手の変えられる恋であつたかとあの人に思われたくない、この人のことはそうなる

べき宿命であれば、またその時というものがあろう、その時になれば自分も初めの恋人と違った人とこの人を思わず同じだけに愛することができようという分別のできた薫は、例のように美しくなつかしい話ぶりで、ただ可憐な人と相手を見るだけで語り明かした。

老いた女房はただの話し声だけのする帳台の様子に失敗したことを思い、また一人はすつと出て行ったららしい音も聞いたので、中の君はどこへおいでになったのであろうか、わけのわからぬことであるといろいろな想像をしていた。

「でも何か思いも寄らぬことがあるのでしようね」  
とも言っていた。



「私たちがお顔を拝見すると、こちらの顔の皺しわまでも伸び、若  
えりさえできると思うようなりっぱな御風采ふうさいの中納言様をなせ  
お避けになるのでしょうか。私の思うのには、これは世間という魔  
が姫君に憑ついているのですよ」

齒の落ちこぼれた女が無愛嬌ぶあいきょうな表情でこう言いもする。

「魔ですつて、まあいやな、そんなものにどうして憑かれておい  
でになるものですか。ただあまりに人間離れのした環境に置かれ  
ておいでになりましたから、夫婦の道というようなことじょうずも上手  
に説明してあげる人もないし、殿方が近づいておいでになるとむ  
しように恐ろしくおなりになるのですよ。そのうち馴なれておしま  
いになれば、お愛しになることもできますよ」

こんなことを言う者もあつてしまひには皆いい氣になり、どうか都合よくいけばいいと言ひ言ひだれも寝入つてしまつた。軒いびきまでもかきだした不行儀な女もあつた。恋人のために秋の夜さえも早く明ける氣がしたと故人の歌つたような間柄になつてゐる女性といたわけではないが、夜はあつけなく明けた氣がして、薰かおるは女よおう王のいづれもが劣らぬ妍けん麗れいさの備わつたその一人と平淡な話ばかりしたままで別れて行くのを飽き足らぬこちもしたのであつた。

「あなたも私を愛してください。冷酷な女王さんをお見習いになつてはいけませんよ」

など、またまた機會のあろうことを暗示して出て行つた。自分

のことでありながら限りない淡泊な行動をとったと、夢のような気も薫はするのであるが、それでもなお無情な人の真の心持ちをもう一度見きわめた上で、次の問題に移るべきであると、不満足な心をなだめながら帰って来た例の客室で横たわっていた。

弁が帳台の所へ来て、

「お見えになりませんが、中姫君はどちらにおいでになるのでございましょう」

と言うのを聞いて、突然なことの身边に起こって、昨夜の幾時間かを親兄弟でもない男と共にいたという羞しゆううち恥心からは黙ってはいしたが、どんな事情がああ始末をもたらしただのであると考えるのであった。昨日語られたことを思い出してみると中

の君の恨めしく思われるのは姉君であつた。今一人の壁の中の蟋こ  
蟀おろぎは暁の光に誘われて出て来た。中の君がどう思っているだろ  
うと気の毒で互いにものが言われない。ひどい仕向けである。今  
からのちもまたどんなことがしいられるかもしれない。姉をさえ信  
じることのできぬのがこの世であるかと中姫君は思いもだえてい  
た。

弁は客室へ行つて薫から、姫君が冷酷にも閨ねやへ身代わりを置いて  
隠れてしまった話をされ、そんなだれも同情を惜しむほどな強  
い拒みようを姫君はされたのであるかと驚きにぼんやりとなつて  
いた。

「今までのつめたいお扱いは、それでもまだ私に希望を捨てさせ

ないものがあつて、私には慰められるところもありましたがね、今日という今日はほんとうに恥ずかしくなつてしまつて、宇治川へ身も投げたい気になりましたよ。私のどんな行為の犠牲にしてもよいというように御寢所へ捨ててお置きになつた女王さんのお気の毒だつたことを思うと、私は今死んでしまうこともならない気がされます。妻になつていただきたいなどということとはどちらの女王さんにも私はもう望まないことにしますよ。中姫君を強制的に妻にしては一生恨みの残ることになりますからね。りっぱな兵部卿の宮様からの申し込みを受けておいでになる方だから、御自身でこうと決めておいでになることもあるだろうと私は知っていますから、あの方に近づいて行こうとは思われなし、こうし

た恥ずかしい立場に置かれた私が、またまいって女王がたにお逢あいするのははばかられます。あなたにお頼みしておくが、愚かな恋をしていた私の話をせめて女房たちにだけでも知られないように黙っていてください」

こう恨みを告げたあとで、平生よりも早く薫は帰ってしまった。中姫君のためにも中納言のためにも気の毒な結果を作ったと弁は昨夜の仲間の人たちとささやき合った。大姫君も事情はよくわかっていないのであったから、妹の女王に薫が深い愛を覚えなかつたのではあるまいかと、早く帰ったことについて胸を騒がせた、妹が哀れでもあった。すべての女房たちの仕業しわざの悪かつたことに基因きんしているのであると思つた。さまざまに大姫君が煩悶はんもんをし

ている時に源中納言からの手紙が来た。平生よりもこの使いがうれしく感ぜられたのも不思議であつた。

秋を感じないように片枝は青く、半ばは濃く色づいた紅葉もみじの枝に、

おなじ枝えを分きて染めける山姫にいづれか深き色と問はばや

あれほど恨めしがつていたことも多く言わず、簡単にこの歌にしたのが手紙の内容であるのを見て、愛が確かにあるようでもなく、ただこんなふうにだけ取り扱って別れてしまう心なのであるかと思うことで姫君が苦痛を感じている時に、だれもだれもが

返事を早くと促すのを聞いて、あなたからと今日は中の君に言うのも恥じられ、自分でするのも書きにくく思い乱れていた。

山姫の染むる心はわかねども移らふかたや深きなるらん

事実に触れるでもなく書かれてあるあげまき総角の姫君の字の美しさ

に、やはり自分はこの人を忘れ果てることはできないであろうと薫は思った。自分の半身のような妹であるからと中の君を薦すすめるふうはたびたび見せられたのであるのに、自分がそれに従わないために謀はかったものに違いない、その苦心をむだにした今になつて、ただ恨めしさから冷淡を装っていれば初めからの願いはいよいよ



実現難になるであろう、中に今まで立たせておいた老女にさえ、自分の愛の深さを見失わせることになり、浮いた恋だったとされてしまうのが残念である。何にもせよ一人の人にこれほどまでも心の惹ひかれることになった初めがくやしい、ただはかないこの世を捨ててしまいたいと願っている精神にも矛盾する身になっているのではないかと自分でさえ恥はずかしく思われることである、いわんや世間の浮気者うわきのように、その恋人の妹にまた恋をし始めるということはできないことであるかおると薫は思い明かした。

次の朝の有ありあけ明月夜に薫は兵部卿ひょうぶきょうの宮の御殿へまいった。

三条の宮が火事で焼けてから母宮とともに薫は仮に六条院へ来て住んでいるのであったから、同じ院内にもおいでになる兵部卿の

宮の所へは始終伺うのである。宮もこの人が近く来て住み、朝夕に往来のできることで満足をしておいでになった。整然としたおすまい住居は前庭の草木のなびく姿も、咲く花も他の所と異なり、流れに影を置く月も絵のように見えた。薫が想像したとおり宮はもう起きておいでになった。風が運んでくるにおいてこの特殊な人をお感じになつて、お驚きになつた宮は、すぐに直衣のうしを召し、姿を正して縁へ出ておいでになつた。階きざはしを上がりきらぬ所に薫がすわると、宮はもつと上にともお言いにならず、御自身も欄おぼし干まによりかかつて話をおかわしになるのであつた。世間話のうちに宇治のこともお言いだしになり、薫の仲介者としての熱意のなさをお恨みになつたが、無理である、自分の恋をさえ遂げえないもの

をと薫は思っている。宇治へ行つて恋人に逢いたいというふうの宮にお見えになるのを知り、平生よりもくわしく山荘の事情、妹の女王のことなどを薫はお話し申した。夜明け前のまたちよつと暗くなる時間であつて、霧が立ち、空の色が冷ややかに見え、月は霧にさえぎられて木立ちの下も暗く艶えんな趣のあるようになった。そのため薫はまた宇治が恋しくなつた。宮が、

「今度あなたが行く時に必ず誘つてください。うちやつて行つてはいけませんよ」

とお言いになつても、薫の迷惑そうにしているのを御覧になつて、

をみなへし  
女郎花咲ける大野をふせぎつつ心せばくやしめを結ゆふらん

とお言いになつた、  
冗じょうだん談のようになつた。

「霧深きあしたの原の女郎花心をよせて見る人ぞ見る

だれでも見られるわけではありませんから」  
などと薫も言つた。

「うるさいことを言うね」

腹をたててもお見せになる宮様であつた。今までから宮のこの御希望はしばしばお聞きしていたのであるが、中の君をよくは知

らず、交際をせぬ薫であつたから、不安さがあつて、容貌ようぼうは御想像どおりであつても、性情などに近づいて物足りなさをお感じになることはあるまいかとあやぶんで、お聞き入れ申し上げなかつたのである。思いもよらずその人に近づいたことによつて、今は不安も心からぬぐわれた薫は、大姫君がわざわざ謀つて身代わりにさせようとした気持ちを無視することも思いやりのないことではあるが、そのようにたやすく恋は改めうるものとは思われな  
い心から、まずその人は宮にお任せしよう、そして女の恨みも宮のお恨みも受けぬことにしたいとこう思い決めたともお知りにならず、自分がはばんでいるようにお言いになるのがおかしかつた。  
「あなたには多情な癖がおありになるのですからね、結局物思い

をさせるだけだと考えられますからです」

女がたの後見者と見せて薫がこう言う。

「まあ見ていたまえ、私にはまだこんな<sup>ひ</sup>に心の惹かれた相手はなかつたのだからね」

宮はまじめにこう仰せられた。

「女王がたにはまだあなたさまを婿君にお迎えする心がなさそうなものですから、私の役は苦心を要するのでございますよ」

と言つて、薫は山荘へ御案内して行つてからのことをこまごまと御注意申し上げていた。

二十六日の彼岸の終わりの日が結婚の吉日になつていたので、薫はいろいろと考えを組み立てて、だれの目にもつかぬように一

人で計らい、兵部卿の宮を宇治へお伴いして出かけた。御母ちゆう中くう宮のお耳にはいつては、こうした恋の御微行などはきびしくお制しになり、おさせにならぬはずであったから、自分の立場が困ることになるとは思うのであるが、におうみや旬宮の切にお望みになることであつたから、すべてを秘密にして扱うのも苦しかつた。

対岸のしかるべき場所へ御休息させておくことも船の渡しなどがめんどろであつたから、山荘に近い自身の莊園の中の人の家へひとまず宮をお降ろしして、自身だけで女王たちの山荘へはいつた。宮がおいでになつたところで見とがめるような人たちもなく、とのい宿直をする一人の侍だけが時々見まわりに外へ出るだけのことであつたが、それにも気けどらすまいとしての計らいであつた。中納

言がおいでになつたと山荘の女房たちは皆緊張していた。女王によおうらは困る気がせずにおられるのではないが、総角の姫君は、自分  
はもうあとへ退いて代わりの人を推薦しておいたのであるからと  
思っていた。中の君は薫の対象にしているのは自分でないことが  
明らかなのであるから、今度はああした驚きをせずに済むことで  
あろうと思ひながらも、情けなく思われたあの夜からは、姉君を  
も以前ほどに信頼せず、油断をせぬ覚悟はしていた。取り次ぎを  
もつての話がいつまでもかわされていることで、今夜もどうなる  
ことかと女房らは苦しがつた。

薫は使いを出して兵部卿の宮を山荘へお迎え申してから、弁を  
呼んで、



「姫君にもう一言だけお話しすることが残っているのです。あの  
方が私の恋に全然取り合ってくださいらないのはもうわかってしま  
いました。それで恥ずかしいことですが、この間の方の所へもう  
しばらくのちに私を、あの時のようにして案内して行ってくださ  
いませんか」

眞実まことらしく薫がこう言うと、どちらでも結局は同じことである  
からと弁は心を決めて、そして大姫君の所へ行き、そのとおりに  
告げると、自分の思ったとおりにあの人は妹に恋を移したとうれ  
しく、安心ができ、寝室へ行く通り路みちにはならぬ縁近い座敷の襖か  
子らかみをよく閉めた上で、その向こうへしばらく語るはずの薫を招  
じた。

「ただ一言申し上げたいのですが、人に聞こえますほどの大声を出すこともどうかと思われれますから、少しお開あけくださいませんか。これではだめなのです」

「これでもよくわかるのですよ」

と言つて姫君は応じない。愛人を新しくする際に虚心平気でそれをするのでないことをこの人は言おうとするのであろうか、今までからこんなふうにしては話し合つた間柄なのだから、あまり冷ややかにものを言わぬようにして、そして夜をふかさせずに立ち去らしめようと思ひ、この席を姫君は与えたのであつたが、襖子の間から女の袖そでをとらえて引き寄せた薫は、心に積もる恨みを告げた。困つたことである、話すことをなげ許したのであろうと

後悔がされ、恐ろしくさえ思うのであるが、じょうず上手にここを去らせようとする心から、妹は自分と同じなのであるからということ、それとなく言っている心持ちなどを男は哀れに思った。

兵部卿の宮は薫がお教えしたとおりに、あの夜の戸口によつて扇をお鳴らしになると、弁が来て導いた。今一人の女王のほうへこうして薫を導きな馴れた女であろうと宮はおもしろくお思いになりながら、ついておいでになり、寢室へおはいりになつたのも知らずに、大姫君はじょうず上手に中の君のほうへ薫を行かせようということを考えていた。おかしくも思い、また気の毒にも思われて、事実を知らせずにおいていつまでも恨まれるのは苦しいことであるろうと薫は告白をすることにした。

「兵部卿の宮様がいつしよに來たいとお望みになりましたから、お断わりをしかねて御同伴申し上げたのですが、物音もおさせにならずどこかへおはいりになりました。この賢ぶった男を上手におだましになったのかもしれない。どちらつかずの哀れな見苦しい私になるでしょう」

聞く姫君はまったく意外なことであつたから、ものもわからなくなるほどに残念な気がして、この人が憎く、

「いろいろ奇怪なことをあそばすあなたとは存じ上げずに、私どもは幼稚な心であなたを御信用申していましたが、あなたには滑こっけい稽けいに見えて侮辱をお与えになつたのでございますね」

総あげまき角かくの女王は極度に口惜くちおしがつていた。

「もう時があるべきことをあらせたのです。私がどんなに道理を申し上げてでも足りなくお思いになるのですでしたなら、私を打ちようちやく擲ちやくでも何でもしてください。あの女王様の心は私よりも高い身分の方にあつたのです。それに宿命というものがあつて、それは人間の力で左右できませんから、あの女王さんには私をお愛しく下さることがなかつたのです。その御様子が見えてお気の毒でしたし、愛されえない自分が恥ずかしくて、あの方のお心から退却するほかはなかつたのです。もうしかたがないとあきらめてくださつて私の妻になつてくださいればいいではありませんか。どんなに堅く襖し子は閉めてお置きになりましたも、あなたと私の間柄を精神的の交際以上に進んでいなかつたとはだれも想像いたしません。

御案内して差し上げた方のお心にも、私がこうして苦しい悶えもたをしながら夜を明かすとはおわかりになつていますまい」

と言う薫は襖子をさえ破りかねぬ興奮を見せているのであつたから、うとましくは思いながら、言いなだめようと姫君はして、なお話の相手はし続けた。

「あなたがお言いになります宿命というものは目に見えないものですから、私どもにはただ事実に対して涙ばかりが胸をふさぐのを感じます。何というなされ方だろうとあさましいのでございませぬ。こんなことが言い伝えに残りましたら、昔の荒唐無稽こうとうむけいな、誇張の多い小説の筋と同じように思われることでしょう。どうしてそんなことをお考え出しになつたのかとばかり思われまして、

私たち姉妹きょうだいへの御好意とはそれがどうして考えられましょう。こんないろいろなにして私をお苦しめにならないでくださいまし。惜しくございません命でも、もしもまだ続いていくようでしたら、私もまた落ち着いてお話のできるころがあると思ひます。ただ今のことを伺いましたら、急に真暗まつくらな気持ちになりました、身体からだも苦しくてなりません。私はここで休みますからお許しくださいませ」

絶望的な力のない声ではあるが、理窟りくつを立てて言われたのが、薫には気恥ずかしく思われ、またその人が可憐かれんにも思われて、「あなた、私のお愛しする方、どんなにもあなたの御意志に従いたいというのが私の願いなのですから、こんなにまで一徹なところ

ろもお目にかけたのです。言いようもなく憎いうとましい人間と私を見ていらつしやるのですから、申すことも何も申されません。いよいよ私は人生の外へ踏み出さなければならぬ気がします」

と言つて薫は歎息たんそくをもらしたが、また、

「ではこの隔てを置いたままで話させていただきましょう。まったく顧みをなさらぬようなことはしないでください」

こうも言いながら袖そでから手を離した。姫君は身を後ろへ引いたが、あちらへ行つてもしまわぬのを哀れに思う薫であった。

「こうしてお隣にいることだけを慰めに思つて今夜は明かしましょう。決して決してこれ以上のことを求めません」

と言ひ、襖子へやを中にしてこちらの室で眠ろうとしたが、ここは



川の音のはげしい山荘である、目を閉じてもすぐにさめる。夜の風の声も強い。峰を隔てた山鳥の妹背いもせのような気がして苦しかった。いつものように夜が白しらみ始めると御寺みでらの鐘が山から聞こえてきた。兵部卿ひょうぶぎょうの宮を気にして咳せき払いかおるを薫は作つた。實際妙な役をすることになったものである。

「しるべせしわれやかへりて惑ふべき心もゆかぬ明けぐれの道  
 こんな例が世間にもあるでしようか」  
 と薫が言うど、

かたがたにくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまどはば

ほのかに姫君の答える歌も、よく聞き取れぬもどかしさと飽き足りなさに、

「たいへんに遠いではありませんか。あまりに御同情のないあなたですね」

恨みを告げているころ、ほのぼのと夜の明けるのにうながされて兵部卿の宮は昨夜の戸口から外へおいでになった。柔らかなその御動作に従って立つ香はことさら用意して燻たきしめておいでになつた匂宮らしかつた。

老いた女房たちはそこそこから薫の帰って行くことに不審を

いただいたが、これも中納言の計ったことであれば安心していてよいと考えていた。

暗い間に着こうと京の人は道を急がせた。帰りはことに遠くお  
思われになる宮であつた。たやすく常に行かれぬことを今から思  
ほしめ

召すからである。しかも「夜をや隔てん」（若草のにひてまくら新手枕を  
まきそめて夜をや隔てん憎からなくに）とお思われになるからで  
あろう。まだ人の多く出入りせぬころに車は六条院に着けられ、  
廊のほうで降りて、女乗りの車と見せ隠れるようにしてはいつて  
来たあとで顔を見合わせて笑つた。

「あなたの忠実な御奉仕を受けたと感謝しますよ」

宮はこうじょうだん冗談を仰せられた。自身の愚かしさの人のよさが

みずから嘲ちようしやう笑されるのであるが、薫は昨夜の始末を何も申し上げなかつた。すぐ宮は文ふみを書いて宇治へお送りになつた。

山莊の女王はどちらも夢を見たあのような気がして思い乱れていた。あの手この手と計画をしながら、気けぶりも初めにお見せにならなかつたと中の君は恨んでいて、姉の女王と目を見合わせようともしない。自身がまつたく局外の人であつたことを明らかに話すこともできぬ姫君は、中の君を遠く気の毒にながめていた。女房たちも、

「昨夜は中姫君のほうにどうしたことがありましたのでございましょう」

などと、大姫君から事実をそれとなく探ろうとして言うのであ

つたが、ただぼんやりとしたふうで保護者の君はいるだけであつたから、不思議なことであると皆思つていた。宮のお手紙も解いて姫君は中の君に見せるのであつたが、その人は起き上がろうともしない。時間のたつことを言つて使いが催促をしてくる。

よのつねに思ひやすらん露深き路のささ原分けて来つるも

書き馴れたみごとな字で、ことさら今日は艶な筆の跡であつたが、ただ鑑賞して見ていた時と違った気持ちでそれに対しては気のめいる悩ましさを覚えさせられる姫君が、保護者らしく返事を代わつてすることも恥ずかしく思われて、いろいろに言つて中の

君に書かせた。薄紫の細長一領に、三重襲かさねはかまの袴を添えて纏頭てんとうに出したの使いが固辞して受けぬために、物へ包んで供の人へ渡した。結婚の後ごちよう朝の使いとして特別な人を宮はお選びになつたのではなく、これまで宇治へ文ふみ使いの役をしていた侍童だつたのである。これはわざとだれにも知られまいとの宮のお計らいだつたのであるから、纏頭てんとうのことをお聞きになつた時、あの氣のきいたふうを見せた老女の仕業しわざであろうとやや不快にお思ひになつた。この夜も薰をお誘いになつたのであるが、冷泉院れいぜいのほうに必ず自分がまいらねばならぬ御用があつたからと申して応じなかつた。ともすればそうであつてはならぬ場合に悟りすました冷靜さを見せる友であると宮は憎いようにお思ひになつた。宇治の大姫

君を薫は情人にしていると信じておいでになるからである。

もうしかたがない、こちらの望んだ結果でなかつたと言つてもおろそかにはできない婿君であると弱くなつた心から総角の姫君は思つて、儀式の装飾の品なども十分にそろつてゐるわけではな  
いが、風流な好みを見せた飾りつけをして第二の夜の宮をお待ち  
した。遠い路みちを急いで宮のお着きになつた時は、姫君の心に喜び  
がわいた。自分にもこうした感情の起こるのは予期しなかつたこ  
とに違ひない。新婦の女王によおうは化粧をされ、服をかえさせられな  
がらも、明るい色の袖そでの上が涙でどこまでも、濡ぬれていくのを見  
ると、姉君も泣いて、

「私はこの世に長く生きていようとも、それを楽しいことに思お

うともしない人ですから、ただ毎日願っていることは、あなただけしあわが幸せになつてほしいということだったのですよ。それに女房たちもこれを良縁だとうるさいまでに言うのですからね、なんといつても、私たちと違つて年をとつていろいろな経験を持つている人たちには、こうした問題についての判断がよくできるものだろう、私一人の意志を立てて、いつまでも二人の独身女であつてはなるまいと考えるようになったことはあつても、突然な今度のようなことであなたの心を乱させようなどは少しも思わなかつたのですよ。でもね、これが人の言う逃げようもない宿命だったのでしようね。私の心も苦しんでいますよ、すこしあなたの気分の晴れてきたところに、私が今度のことに關係していなかつたこと



の弁明もして聞いてもらいますよ。知らぬ私をあまりに恨んではあなたが罪を作ることになります」

と姫君が中の君の髪を繕いながら言ったのに対して、中の君は何とも返辞はしなかったが、さすがに、こうまで自分を愛して言う姉君であるから、危険な道へ進めようとしたわけではあるまい、そうであるにもかかわらず、薄い愛より与えぬ人の妻になって、自分のために姉君へまた新しい物思いをさせることが悲しいと、今後の日を思つて歎いていた。

ちんにゆう  
闖入者

入者に驚きあきれていた夜の顔さえ美しい人であったのにまして、今夜は美しい服を着け、化粧の施されている女王を宮は御覧になって、いつそうこまやかに御愛情の深まつていくにつ

けても、たやすく通いがたい長い路みちが中を隔てているのを、胸の痛くなるほどにも苦しく思おぼしめ召されて、真心から変わらぬ将来の誓いをされるのだったが、姫君はまだ自身の愛のわいてくるのを覚えなかつた。わからないのであつた。非常に大事にかしずかれた高貴な姫君といつても、世間というものと今少し多く交渉を持つていて、親とか兄弟とかの所へ出入りする異性があつたなら、羞しゆうち恥心などもこれほどになくて済むであらうと思われる。召使いどもにあがめられる生活はしていないが、山里であつたから世間に遠くて、人に馴なれていない中の君は、地からわいたような良お人がただ恥つとずかしい人とより思われないのであつて、自分の言うことなどは田舎風いなかに聞こえることばかりであらうと思つて、ちよ

つとした宮へのお返辞もできかねた。しかしながら二女王を比べ  
て言えば、貴女らしい才の美しいひらめきなどはこの人のほうに  
多いのである。

三日にあたる夜は餅もちを新夫婦に供するものであると女房たちが  
言うため、そうした祝いもすることかと総角の姫君は思い、自身  
の居間でそれを作らせているのであつたが、勝手がよくわからな  
かつた。自分が年長者らしくこんなことを扱うのも、人が何と思  
つて見ることかとはばかられる心から、赤らめている顔が非常に  
美しかった。姉心というのか、おおようにけだかに気高い性格でいて、妹  
の女王のためには何かと優しいこまごまとした世話もする姫君で  
あつた。源中納言から、

今夜はまいって、雑用のお手つだいもいたしたく思うのですが、先夜の宿直とのいにお貸しくございました所が所ですから、少し身体からだをそこねまして、まだ癒なおらない私は、どうしても出かけられませぬ。

と、二枚の檀紙に続けて書いた手紙を添え、今夜の祝儀しゆこの肴類肴、それからまた縫わせる間のなかつた衣服地のいろいろを巻いたままで入れ、幾つもの懸子かけこへ分けて納めた箱を弁の所へ持たせてよこした。女房たち用にということであつた。母宮のお住す居まいにいた時であつて、思うままにも取りまとめる間がなかつたものらしい。普通の絹あやや綾あやも下のほうには詰め敷かれてあつて、女王がたにと思つたらしい二襲かさねの特に美しく作られた物の、その一

つこのほうの単衣ひとえの袖そでに、次の歌が書かれてあつた、少し昔風なこ  
とであるが。

さよ衣着てなれきとは言はずとも恨言かごとばかりはかけずしもあ  
らじ

これは戯れに威嚇いかくして見せたのである。中の君に対して言われ  
ているのであろうが、いずれにもせよ羞恥しゆうちを感じずにはいられ  
ないことであつたから、返事の書きようもなく姫君の困つてい  
る間に、纏頭てんとうを辞する意味で使いのおもだつた人は帰つてしまつ  
た。下の侍の一人を呼びとめて姫君の歌が渡された。

隔てなき心ばかりは通ふとも馴れし袖とはかけじとぞ思ふ

心のかき乱されていたあの夜の名残なごりで、思っただけの平凡な歌より詠よまれなかつたのであろうと受け取った薫は哀れに思った。

兵部卿の宮はその夜宮中へおいでになったのであるが、新婦の宇治へ行くことが非常な難事にお思われになって、人知れず心を苦しめておいでになる時に、中ちゆうぐう宮が、

「どんなに言ってもあなたはいつまでも一人でおいでになるものだから、このごろは私の耳にもあなたの浮いた話が少しずつはいってくるようになりましたよ。それはよくないことですよ。風流

好きとか、何々趣味の人とか人に違つた評判は立てられないほうがいいのですよ。お上もあなたかみのことを御心配しておいになります  
ます」

と仰せになつて、私邸に行つておいでがちな点で御忠告をあそばしたために、ひょうぶきょう兵部卿の宮は時が時であつたから苦しくお思  
いになつて、きりつぼ桐壺の宿直所とのいへおいでになり、手紙を書いて宇治  
へお送りになつたあと、心が落ち着かず吐息といきをついておいでに  
なるところへ源中納言が来た。宇治がたの人とお思ひになるとう  
れしくて、

「どうしたらいいだろう。こんなに暗くなつてしまつたのに、出  
られないので煩悶はんもんをしているのですよ」

こうお言いになり、歎かわしそうなふうをお見せになったが、  
なおよく宮の新婦に対する真心の深さをきわめたく思った薫は、  
「しばらくぶりで御所へおいでになりましたあなた様が、今夜宿  
直のいをあそばさないですぐお出かけになつては、中宮様はよろしく  
なく思召すでしょう。先ほど私は、台盤所のほうで中宮様のお言  
葉を聞いておりました、私がよろしくないお手引きをいたしましたし  
たことでお叱りしかを受けるのでないかと顔色の変わるのを覚えまし  
た」

と申して見た。

「私がひどく悪いようにおつしやるではないか。たいていのこと  
は人がいいかげんなことを申し上げているからなのだろう。世間



から非難をされるようなことは何もしていないではないか。何にせよ窮窟な身の上であることがいけないね。こんな身分でなければと思う」

心の底からそう思召すふうで仰せられるのを見て、お気の毒になつた薫は、

「どうせ同じことでございますから、今晚のあなた様の罪は私が被ることにはいたしまししょう、どんな犠牲もいといません。木幡の山に馬はいかがでございましょう（山城の木幡の里に馬はあれど徒歩よりぞ行く君を思ひかね）いっそうお樽は立つことになりまして」

こう申し上げた。夜はますます暗くなつていくばかりであつた

から、忍びかねて宮は馬でお出かけになることになった。

「お供にはかえって私のまいらぬほうがよろしゅうございませう。私は宿直とのいすることにいたしました、あなた様のために何かと都合よくお計らいいたしましょう」

と言つて、薫は残ることにした。

薫が中宮の御殿へまいると、

「兵部卿の宮さんはお出かけになつたらしい。困つた御行跡ね。

お上かみがお聞きになれば必ず私がよく忠告をしてあげないからだとお思ひになつてお小言をあそばすだらうから困るのよ」

こうお后きさきは仰せになつた。多くの宮様が皆大人おとなになつておいでになるのであるが、御母宮はいよいよ若々しいお美しさが増して

お見えになるのであった。女によいち一の宮みやもこんなのでおありになるのであろう、どんな機会によつて自分はこれほど一の宮へ接近することができるのであろう、お声だけでも聞きうることでできようと、幼い日からのあこがれが今またこの人の心を哀れにさせた。好色な人が思うまじき人を思うことになるのも、こうした間柄で、さすがにある程度まで近づくことが許されていて、しかもきびしい隔もたてがその中に立てられているというような時に、苦しみもし、悶もたえもするのであろう、自分のように異性への関心の淡いものはないのであるが、それでさえもなお動き始めた心はおさえがたいものなのであるから、などと薰は思っていた。侍女たちは容貌ようぼうも性情も皆すぐれていて、欠点のある者は少なく、どれにもよい

ところが備わり、また中には特に目だつほどの人もあるが、恋のあやまちはすまいと決めているから、薫は中宮の御殿に来ていてもまじめにばかりしていた。わざとこの人の目につくようにふるまう人もないのである。氣品を傷つけないようにと上下とも慎み深く暮らす女房たちにも、個性はそれぞれ違つたものであるから、美しい薫への好奇心が、おさえられつつも外へ現われて見える人などに、薫は憐れみあわも感じ、心の惹かれひそうになることがあつても、何事も無常の人世なのであるからと冷静に考えては見ぬふりをつけた。

宇治では薫から大おおぎよう形な使いなどもよこされてあるのに、深更まで宮はお見えにならず、お手紙の使いだけの来たために、こ

れであるから頼もしい方とは思われなかつたのであると、姉女王が煩悶はんもんしていたうちに、夜中近くなつて、荒い風の吹き立つ中に、兵部卿の宮は艶えんなおいを携えて、美しいお姿をお見せになつたのであつたから、喜びを覚えなわけもない。新夫人の中の君も前に似ぬ好意をお持ちしたことと思われる。中の君は非常に美しい盛りの容貌ようぼうを、まして今夜は周囲の人たちによつてきれいに粧よそおわれていたのであつたから、また類たぐいもない麗人と思われた。多くの美女を知つておいでになる宮の御目にも欠点をお見いだしになることはなくて、姿も心も接近してますますすぐれたことのも明らかになつた恋人であると思召すばかりであつたから、山荘の老いた女房などは満足したか自身の表情がどんなに醜いかも知ら

ずに、ゆがんだ笑顔えがおをしながら中の君を見て、これほどにもりつぱな方が凡人の妻におなりになつたとしたらどんなに残念に思われるであろう、御運よく理想的な良人おっとをお持ちになることができてよかつたと言ひ合ひ、大姫君が薫の熱心な求婚に応じようとなひのをひそかに非難していた。こうした中年になつた人たちが薫から贈られた美しいいろいろな絹で衣装を縫つて、それぞれ似合ひもせぬ盛装をしている中に一人でも感じのよいと思われる女房はなかつた。総角あげまきの姫君がこれを見て、自分も盛りの過ぎた女である、このごろ鏡を見ると顔は痩やせてばかりゆく、この人たちでも自身では皆相当にきれいであるという自信を持つていて、醜いと認める者はないはずである、頭の後ろの形がどうなつてい

るかも思わずに 額ひたいがみ 髪かみ だけを深く顔に引っかけて化粧をした顔を恥ずかしいとは思わぬらしい。自分はまだあれほどにはなつていず、目も鼻も正しい形をしていると思うのは、わがことであつて身勝手な思いなしによるものなのであらうと気恥ずかしいような思いをしながら茫ぼうと外をながめつつ寝ていた。すべての整つたりつぱな青年である源中納言の妻になることはいよいよ似合わからぬことと自分は思われる、もう一、二年すれば衰え方がもつと急速度になることであらう、もともと貧弱な体質の自分なのであるからと、大姫君はほつそりとした手首を袖の外に出しながら人生の悲しみを深く味わつていた。

兵部卿の宮は今夜のお出かけにくかつたことをお考えになると、

将来も不安におなりになつて、今さえそれでお胸がふさがれてしまふようになるのであつた。中宮の仰せられた話などをされて、「變わりない愛を持つていながら来られない日が続いても疑いは持たないでください。仮にもおろそかにあなたを思つてゐるのだつたら、こんな苦心を払つて今夜なども出て来られるはずはありません。それなのに私の愛を信じることがおできにならないで、はんもん煩悶したりされるのが気の毒で、自分のことはどうともなれとまで思つて出かけて来たのですよ。始終これが続けられるとも思われませんかからね、あなたの住むのに都合のよい所をこしらえて私の近くへ移したく思いますよ」

宮はこれを真心からお言いになるのであつたが、間の途絶える



であろうことを今からお言いになるのは、名高い多情な生活から、恨ませまいための予防の線をお張りになるのであるかと、心細さに馴ならされた女にょおう王は前途をも悲観せずにはおられなかつた。夜明けに近い空模様を、横の妻戸を押しあけて宮は女王も誘つて出しておながめになるのであつた。霧が深く立つて特色のある宇治の寂けしきしい景色の作られている中を、例の柴しばふね船のかすかに動いて通つて行くあとには、白い波が筋をなして漂つていた。珍しい景をかたわらにした家であると風流みやびごころ心におもしろく宮は思召した。東の山の上からほのめいてきた暁の微光に見る中の君の容姿は整いきつた美しさで、最上の所にかしずかれた内親王もこれにまさるまいと思われになつた。現在の帝みかどの皇子であるからという気

持ちで自分のほうの思い上がっているのは誤りである、この人の持つよさを今以上によく見もし、知りもしたいと思召す心がいっぱいになり、その人を少し見ることがおできになってかえってより多くがお望まれになった。かわおと河音はうれしい響きではなかったし、宇治橋のただ古くて長いのが限界を去らずにあったりして、霧の晴れていった時には、荒涼たる感じの与えられる岸のあたりも悲しみになった。

「どうしてこんな土地に長い間いることができたのですか」

とお言いになり、宮の涙ぐんでおいでになるのを見て、女王は恥ずかしい気がした。そして今よく見る宮のお姿はきわめてえん艶であつた。この世かぎりでない契りをおささやきになるのを聞いて

いて、思いがけず結ばれた人とはいえ、かえつてあの冷静なふうの中納言を良人おっとにしたよりはこの運命のほうが気安いと女王は思っているのであった。あの人の熱愛している人は自分でなくもあつたし、澄みきつたような心の様子に現われて見える点でも親しまれないところがあつた、しかもこの宮をそのころの自分はどう思っていたであろう、まして遠い遠い所の存在としていた。短いお手紙に返事をするこゝとすら恥ずかしかつた方であるのに、今の心はそうでない、久しくおいでにならぬことがあれば心細いであろうと思われるのも、われながら怪しく恥ずかしい変わりようであるとの君は心で思った。お供の人たちが次々に促しの声を立てるのを聞いておいでになつて、京へはいつて人目を引くように

明るくならぬようにと、宮はおいでになろうとする際も御自身の意志でない通い路じの途絶えによつて、思い乱れることのないようにとかえすがえすもお言いになつた。

中絶えんものならなくに橋姫の片敷く袖そでや夜半よはに濡ぬらさん

帰ろうとしてまた 躊ちゆう躇ちよをあそばされた宮がこの歌をささやかれたのである。

絶えせじのわが頼みにや宇治橋のはるけき中を待ち渡るべき

などとだけ言い、言葉は少ないながらも女王の様子に別れの悲しみの見えるのをお知りになり、たぐいもない愛情を宮は覚えておいでになった。

若い女性の心に感動を与えぬはずのない宮の御朝姿を見送って、あとに残ったにおいなどの身にしむ人にいつか女王はなっていた。お立ちのおそかった今朝けさになつてはじめて女房たちは宮をおのぞき見した。

「中納言様はなつかしい御気品のよさに特別なところがおありになります。今一段上の御身分という思いなしからでしょうか、はなやかな御美貌びぼうは何と申し上げようもないくらいにお見えになりましたね」

こんなことを言つてほめそやした。

京への道すがら、別れにめいつたふうを見せた女王をお思い出しになつて、このままもう一度山莊へ引き返したいと、御自身ながら見苦しく思召すまで恋しくお思われになるのであつたが、世間の取り沙汰ざたを恐れてお帰りになつて以来、容易にお通いになれずお手紙だけを日ごとに幾通もお送りになつた。誠意がないのではおありになるまいと思ひながらもお途絶えの日が積もつていくことで、姉の女王は思い悩んで、こんな結果を見て苦勞をすることがないようと願つていたものを、自身が当事者である以上に苦しいことであると歎かれるのであつたが、これを表面に見せてはいつそう中の君が氣をめいらせることにならうと思ふ心から、

気にせぬふうを装いながらも、自分だけでも結婚しての苦を味わうまいといよいよ薫の望むことに心の離れていく大姫君であつた。

薫も兵部卿の宮の宇治へおいでになれない事情を知つていて、山莊の女王が待ち遠しく思うことであろうと、自身の責任であるように思い、宮にそれとなくお促しもし、宮の御近状にも注意を怠らなかつたが、宮が宇治の女王に愛情を傾倒しておいでになることは明らかになつたために、今の状態はこうでも不安がることはないとの君のために胸をなでおろす思いをした。

九月の十日で、野山の秋の色がだれにも思いやられる時である、空は暗い時雨しぐれをこぼし、恐ろしい気のある雲の出ている夕べであつた、宮は平生以上に宇治の人がお思われになつて、何が起ころ

うとも行つてみようか、どうしたものとお一人では決断がおできにならないで迷つておいでになるところへ、そのお思いを想像することのできた薫がお訪たずねして来た。

「山里のほうはどうでしょう」

中納言の言つたことはこれであつた。お喜びになつて、

「では今からいっしょに出かけよう」

とお言いになつたため、におうみや 匂宮のお車に薫中納言は御同車し

て京を出た。山路へかかつてくるにしたがつて、山荘で物思ひをしている恋人を多く哀れにお思ひになる宮でおありになつた。同車の人へもその点で御自身も苦しんでおいでになることばかりをお話しになつた。行く秋の黄たそがれ昏時の心細さの覚えられる路みちへ、



冷たい雨が降りそそいでいた。衣服を湿らせてしまったために、高い香かおりはまして一つになつて散り広がるのが艶えんで、村人たちは高華な夢に行き逢あつたように思つた。

毎日毎日婿君の情の薄さをかこつていた山荘の女房たちは、悦よろこびを胸に満たせてお席を作つたりなどしていた。京のあちらこちらへ女房勤めに出ている娘とか姪めいとかをにわかにも手もとへ呼び寄せて、中の君のそば仕えをさせることにした女房も二、三人あつたのである。今まで軽けいべつ蔑べつをしていた浮薄な人たちにとって、尊貴な婿君の出現は驚異に価たすることであつた。

大姫君はこの寂しい夜を訪たずねたもうた宮をうれしく思うのであつたが、少し迷惑な人が添かおるつて来たと思わなくてもないもの

の、慎重な、思いやりのある態度を恋にも忘れずにいてくれた人とその人を思う時、匂宮の御行為はそうでなかったと比較がされ感謝の念は禁じられなかった。中の君の媚君として宮に山莊相当な御饗きようおう応を申し上げて、薫は主人がたの人として気安く扱いながらも、客室の座敷に据すえられただけであるのを恨めしくその人は思っていた。さすがに気の毒に思われて姫君は物越しで話すことにした。自分の心の弱さからつまずいて、またも初めに恋は返されたではないか、こんな状態を続けていくことはもう自分には不可能であると思い、薫は言葉を尽くして恋人に恨みを告げようとした。ようやくこの人の尊敬すべき気持ちも悟った姫君であるが、中の君が結婚をしたために物思いに沈むことの多くなつた

ことによつて、いつそう恋愛というものをいとわしいものに思い込むようになり、これ以上の接近は許すまい、清い愛を今では感じてゐる相手であるが、この人を恨むことが結婚すれば生じるに違ひない、自身もこの人も変わらぬ友情を続けていきたいとこう深く心に決めてゐるためであつた。宮についての話になつて、薫のほうから中の君の様子などを聞くと、少しずつ近ごろのことで、薫の想像してゐたようなことも姫君は語つた。薫は氣の毒になり、宮が深い愛着をお持ちになること、自分が探つて知つてゐる御自由のない近ごろの憂鬱ゆううつなお日送りなどを話してゐた。姫君は平生より機嫌きげんよく話したあとで、

「こんなふうな、新たな心配にとらわれておりますことも終わり

まして、気の静まりましたところにまたよくお話を伺いましょう」

と言った。反感を起こさせるような冷淡さはなくて、しかも襖か

らかみ

子は堅く閉ざされてあつた。しいてその隔てを取り除こうとす

るのは甚だしく同情のないふるまいである。と姫君の思っているのを知っている薫は、この人に考えがあることであろう、軽々しく他人の妻になつてしまうようなことはないと思はれる人であるからと、いつもゆとりのある心のこの人は、恋に心を焦こがしながらもそれをおさえることはできた。

「あなたの御意志はどこまでも尊重しますが、こうして物越しでお話ししていることの不満足感を救つてだけはください。先日のように近くへまいってお話をさせていたいただきたいのです」

と責めてみたが、

「このごろの私は平生よりも衰えていましてね、顔を御覧になつて不愉快におなりになりはしないかと、どうしたのでしょうか、そんなことの気になる心もあるのですよ」

と言ひ、ほのかに総角の姫君の笑つた気配けはいなどに怪しいほどの魅力のあるのを薫は感じた。

「そんなつきも離れもせぬお心に引きずられてまいって、私はしまいにどうなるのでしょうか」

こんなことを言ひ、男は歎息をしがちに夜を明かした。

兵部卿ひょうぶきょうの宮は、薫が今も一人ひとり臥ねをするにすぎない宇治の夜

とは想像もされないで、

「中納言が主人がたぶつて、寢室に長くいるのが恨めしい」

とお言いになるのを、不思議な言葉のように中の君はお聞きし  
ていた。

無理をしておいでになつても、すぐにまたお帰りにならねばな  
らぬ苦しさに宮も深い悲しみを覚えておいでになつた。こうした  
お心を知らない中の君は、どうなつてしまうことか、世間の物笑  
いになることかと歎いているのであるから、恋愛というものはし  
て苦しむほかのないことであると思われた。京でも多情な名は取  
つておいでになりながら、ひそかに通つてお行きになる所とは  
さすがにない宮でおありになつた。六条院では左大臣が同じ邸内  
に住んでいて、匂宮の夫人に擬している六の君に何の興味もお持

ちにならぬ宮をうらめしいようにも思っているらしかった。好色  
男的な生活をしていられると行って、容赦なく宮のことを御非難  
して帝にまでも不満な気持ちをお洩らし申し上げるふうであつた  
から、八の宮の姫君という、だれにも意外な感を与える人を夫人  
としてお迎えになることにはばかられるところが多かつた。軽い  
恋愛相手にしておいでになる女性は、宮仕えの体裁で二条の院な  
り、六条院なりへお入れになることも自由にお計らいになること  
ができて、かえつてお気楽であつた。そうした並み並みの情人と  
は少しも思つておいでにならないのであつて、もし世の中が移り、  
帝と后のかねての御希望が実現される日になれば、だれよりも高  
い位置にこの人をすえたいと思うのであるからと、現在の宮のお

心は宇治の中の君に傾き尽くされていて、その人をいかにして幸福ならしめ常に相見る方法をいかにして得ようかとばかり考えておいでになった。中納言は火災後再築している三条の宮のでき上がり次第によい方法を講じて大姫君を迎えようと考えていた。やはり人臣の列にある人は気楽だといつてよい。

これほど愛しておいでになりながら、結婚を秘密のことにしておありになるために、宮にも中の君にも煩悶はんもんの絶えないらしいことが気の毒で、このお二人の関係を自分から中ちゆうぐう宮に申し上げて御了解を得ることにしたい。当座はお騒がれになって、めんどうな目に宮はおあいになるかもしれぬが、中の君のほうのためを思えば、それは一時的なことであつて、直接苦痛になることも



あるまい、こんなふうには夜も明かし果てずに帰ってお行きになる宮のお気持ちのつらさはさぞとお察しができて心苦しい、結婚が公然に認められるようになれば、中の君に十分な物質的援助をして、宮の夫人たるに恥のない扱いを兄代わりになってしてみたい、とこう思うようになった薫は、しいて内密事とはせず、このごろも冬の衣がえの季節になっているが、自分のほかにだれがその仕度したくに力を貸すものがあるうと思いやつて、御帳みちょうの懸かけ絹、壁か代べしろなどというものは、三条の宮の新築されて移転する準備に作らせてあつたから、それらを間に合わせに使用されたいというふうに伝えて宇治へ送つた。またいろいろな山荘の女房たちの着用するものも自身の乳母めのとなどに命じて公然にも製作させた薫であつ

た。

十月の一日ごろは網代あじろの漁も始まつていて、宇治へ遊ぶのに最も興味の多い時であることを申して中納言が宮をお誘いしたために、兵部卿の宮は紅葉見もみじみの宇治行きをお思い立ちになった。宮にお付きしていて親しく思召おぼしめされる役人のほかに殿上役人の中で特に宮のお愛しになる人たちだけを数にして微行のお遊びのつもりであったのであるが、大きな勢いを負つておいでになる宮でありません。ありになったから、いつとなくたいそうな催しになつていき、予定の人数のほかに左大臣家の宰相中將がお供申し上げた。高官として源中納言だけが随したがいたてまつつた。殿上役人の数は多かつた。

必ず女によおう王たちの山莊へお寄りになることを信じている薫から、

宮のお供をして相当な数の客が来ることを考えてお置きください

い。先年の春のお遊びに私と伺った人たちもまた参邸を望んで、不意にお訪たずねしようとするかもしれない。

などとこまごま注意をしてきたために、御簾みすを掛け変えさせ、

あちこちの座敷の掃除そうじをさせ、庭の岩いわ蔭かげにたまつた紅葉もみぢの朽ち

葉を見苦しくない程度に払わせ、小流れの水草をかき取らせなど女王はさせた。薫のほうからは菓子あまのよいのなども持たせて来、

また接待役に出す若い人たちも来させてあつた。こんなにもする薫の世話を平気で受けていることは気づらいことに姫君は思つていたが、たよるところはほかにないのであるから、こうした因縁

と思ひあきらめて好意を受けることにし、兵部卿の宮をお迎えする用意をととのえた。

遊びの一行は船で河を上り下りしながらおもしろい音楽を奏する声も山荘へよく聞こえた。目にも見えないことではなかつた。

若い女房らは河に面した座敷のほうから皆のぞいていた。宮がどこにおいでになるのかはよくわからないのであるが、それらしく紅葉の枝の厚く屋形に葺いた船があつて、よい吹奏樂はそこから水の上へ流れていた。河風がはなやかに誘つていたのである。だれもが敬愛しておかしくしていることはこうした微行のお遊びの際にもいかめしくうかがわれる宮を、年に一度の歡会しかない七たなばた夕ひこぼしの彦星おとすに似たまれな訪れよりも待ちえられないにしても、

婿君と見ることは幸福に違いないと思われた。

宮は詩をお作りになる思おぼしめ召おぼしめして文章博もんじょうはかせ士しなどを随したがえておいでになるのである。夕方に船は皆岸へ寄せられて、奏樂は続いて行なわれたが、船中で詩の筵えんは開かれたのであつた。音楽をする人は紅葉の小枝の濃いうすの淡いうすのを冠かぶに挿さして海仙樂かいせんらくの合奏を始めた。だれもだれも楽しんでる中で、宮だけは「いかなれば近江あふみの海ぞかかるてふ人あふみをみるめの絶えてなければ」という歌の気持ちを覚えておいでになって、遠方人おちかたびとの心（七夕のあまのと渡るこよひさへ遠方人のつれなかるらん）はどうであろうとお思いになり、ただ一人茫然ぼうぜんとしておいでになるのであつた。おりに合つた題が出されて、詩の人は創作をするのに興奮していた。

船中の人の動きの少し静まっていくころを待つて山荘へ行こうと薫も思い、そのことを宮へお耳打ちしていたうちに、御所から中宮のお言葉を受けて宰相の兄の衛門督えもんのかみがはなばなしくずいじん隨身を引き連れ、正装姿でお使いにまいった。こうした御遊行はひそかになされたことであつても、自然に世間へうわざ噂に伝わり、あとの例にもなることであるのに、重々しい高官の御随行のわずかなままでお出かけになつたことがお耳にはいつて、衛門督が派遣され、ほかにも殿上役人を多く伴わせて御一行に加えられたのである。こんなためにもまた騒がしくなつて、思う人を持つお二人は目的の所へ行かれぬ悲哀が苦痛にまでなつて、どんなこともおもしろくは思われなくなつた。宮のお心などは知らずに酔い乱れて、だ

れも音楽などに夢中になった姿で夜を明かした。それでも次の日になればという期待を宮は持つておいでになったが、また朝になつてから中宮大夫だゆうとまた多くの殿上役人が来た。宮は落ちいぬ心になつておいでになつて、このまま帰る気などにはおなりになれなかつた。

山莊の中の君の所へはお文ふみが送られた。風流なことなどは言つておいでになる余裕がお心になく、ただまじめにこまごまとお心持ちをお伝えになつたものであつたが、人が多く侍している際であるからと思つて女王は返事をしてこなかつた。自身のような哀れな身の上の者が愛人となつているのに、不釣合ふつりあいな方であると女は深く思つたに違いない。遠い道が間にある時は相見る日のま

れなのも道理なことに思われ、こんな状態に置かれていても忘れてはいないのであろうとみずから慰めることもできた中の君であつたが、近い所に来て派手はでなお遊びぶりを見せられただけで、立ち寄ろうとされぬ宮をお恨めしく思い、くちおしくも思つて悶もたえずにはいられなかつた。

宮はまして憂鬱ゆううつな気持ちにおなりになつて、恋しい人に逢あわれぬ不愉快さをどうしようもなく思召された。網代あじろの氷魚ひおの漁もことに多くて、きれいないろいろの紅葉にそれを混ぜて幾つとなく籠かごにしつらえるのに侍などは興じていた。上下とも遊山ゆうざんの喜びに浸っている時に、宮だけは悲しみに胸を満たせて空のほうばかりを見ておいでになつた。そうするとお目につくのは女王の山荘



の木立ちであつた。大木の常磐木ときわぎへおもしろくかかつた蔦紅葉つたもみじの色さえも高雅さの現われのように見え、遠くからはすぐくさえ思われる一構えがそれであるのを、中納言も船にながめて、自分がたいそうに前触れをしておいたことがかえつて物思いを深くさせる結果を見ることになつたかと歎かわしく思つた。

一 昨年の春薫に伴われて八の宮の山莊をお訪ねした公達きんだちは、その時の川べの桜を思い出して、父宮を失われた女王たちがなおそこにおられることはどんなに心細いことであろうと同情し合つていた。一人を兵部卿の宮が隠れた愛人にしておいでになるといふ噂を聞いている人もあつたであろうと思われる。事情を知らぬ人も多いのであるから、ただ孤女になられた女王のことを、こう

した山里に隠れていても、若い麗人のことは自然に世間が知って  
いるものであるから、

「非常な美人だということですよ。十三絃げんの琴の名手だそうです。  
故人の宮様がそのほうの教育をよくされておいたために」

などと口々に言っていた。宰相の中將が、

いつぞやも花の盛りに一目見し木の下もとさへや秋はさびしき

八の宮に縁故の深い人であるからと思つて薫にこう言った。そ  
の人、

桜こそ思ひ知らすれ咲きにほふ花も紅葉もみぢも常ならぬ世に

衛門督えもんのかみ、

いづこより秋は行きけん山里の紅葉の蔭かげは過ぎうきものを

中宮大夫、

見し人もなき山里の岩がきに心長くも這はへる葛くずかな

だれよりも老人であるから泣いていた。八の宮がお若かつたこ

ろのことを思い出しているのであろう。 ひょうぶぎょう兵部卿の宮が、

秋はてて寂しきまさる木この本もとを吹きな過ぐしみね嶺の松風

とお歌いになって、ひどく悲しそうに涙ぐんでおいでになるのを見て、秘密を知っている人は、評判どおりに宮はその人を深く愛しておいでになるらしい、こんな機会にさえそこへおいでになることがおできにならないのはお気の毒であると思つているのであるが、そうした人たちだけをつれて山荘へおはいりになることも御実行のできないことであつた。人々の作つた詩のおもしろい一節などを皆口ずさんだりして、歌のほうも平生とは違つた

旅のことであるから相当に多くできていたが、酒酔いをした頭から出たものであるから、少しを採録したところで、佳作はなかつまらぬから省く。

山荘では宮の一行が宇治を立つて行かれた気配けはいを相当に遠ざかるまで聞こえた前駆の声で知り、うれしい気持ちはしなかつた。御歓待の仕度したくをしていた人たちは皆はなはだしく失望をした。大姫君はましてこの感を深く覚えているのであつた。やはり噂されるように多情でわがままな恋の生活を事とされる宮様らしい、よそながら恋愛談を人のするのを聞いていると、男というものは女に向かつて嘘うそを上手じょうずに言うものであるらしい、愛していない人を愛しているふうに巧みな言葉を使うものであると、自分の家に

いるつまらぬ女たちが身の上話にしているのを聞いていた時は、身分のない人たちの中にだけはそうしたふまじめな男もあるのであろう、貴族として立っている人は、世間の批評もはばかって慎むところもあるのであろうと思つていたのは、自分の認識が足りなかつたのである、多情な方のように父宮も聞いておいでになつて、交際はおさせになつたがこの家の婿になどとはお考えにならなかつたものらしかつたのに、不思議なほど熱心に求婚され、すでにもう縁は結ばれてしまい、それによつていつそう自分までが心の苦勞を多くし不幸さを加えることになつたのは歎かわしいことである。接近して愛の薄くおなりになつた宮のお相手の妹を、中納言は軽蔑<sup>けいべつ</sup>して考えないであろうか、りつぱな女房がいるの

ではないが、それでもその人たちがどう思うかも恥ずかしい。人笑われな運命になったと煩悶はんもんすることによつて姉女王は健康をさえもそこねるようになった。当の中の君はたまさかにしかお逢あいしない良人であるが、熱情的な愛をささやかれていて、今眼前にどんなことがあるともお心のまつたく変わるようなことはあるまい、常においでになることのできないのも余儀ない障さわりがあるからに相違ないとたのむところもあるのであつた。ここしばらくおいでにならなかつたのであるから切なく思わぬはずもないのに、近くへお姿をお現わしになつただけで行つておしまいになつたことでは恨めしく残念な思いをして気をめいらせているのが、  
総あげまき角の姫君には堪えられぬほど哀れに見えた。世間並みの姫君

らしい宮殿にかしずかれていたならば、この邸やしきがこんな貧弱なものでなければ宮は素通りをなされなかつたはずであるのと思われるのである。自分もまだ生きているとすれば、こうした目にあわされるであろう、中納言がいろいろな言葉で清い恋を求めるというのも、自分をためそうとする心だけであつて、自分一人は友情以上に出まいとしても、あの人の本心がそれでないのでは行くところは知れきつたことで、自分のしりぞけるのにも力の限度がある、家にいる女たちは媒介役の失敗に懲りもせず、今もどうかして中納言を自分の良人おつとにさせたいと望まない者もないのであるから、自分の気持ちは尊重されず、結果としては自分があの人の妻にされてしまうことになるのであろう、これが取りも直さ



ず父君が、みずからをよく護まもつていくようにと仰せられたことに  
違いない、不幸な自分たちは母君をも早く失い、父宮にもお別れ  
してしまったが、薄命な者であるからどうなつてもよいと自身を  
軽く扱つて、見苦しい捨てられた妻というものになり、お亡なくな  
りになつたあとの父君のお心までをお悩ましさせることになるの  
は悲しい。自分一人だけでもそうした物思いに沈まないで済む処  
女を保つたままで病死をしてしまいたいと、こんなことを明け暮  
れ思い続ける大姫君は、心細い死の予感をさえ覚えて、中の君を  
見ても哀れで、自分にまで死に別れたあとではいつそう慰みどこ  
ろのない人になるであろう、美しいこの人をながめることが自分  
の唯一の慰安で、どうかして幸福な女にさせたいとばかり願つて

いた、どんなに高貴な方を良人に持ったといつても、今度のよう  
な侮辱を受けながらなお尼にもならず妻として孤閨こけいを守つていく  
ことは例もないほど恥ずかしいことに違いないと、それからそれ  
へと思ひ続けていく大姫君は、自分ら姉きょうだい妹は現世で少しの慰  
めも得られないまままで終わる運命を持つものらしいと心細くなる  
のであつた。

兵部卿の宮は御帰京になつたあとでまたすぐに微行で宇治へお  
行きになろうとしたのであつたが、

「兵部卿の宮様は宇治の八の宮の姫君とひそかな關係を結んでお  
いになりまして、突然に時々近郊の御旅行と申すようなことを  
お思い立ちになるのでございます。御軽率すぎることで世間で

もよろしくはお噂うわさいたしません」

と左大臣の息子の衛門督むすこ えもんのかみがそつと中宮へ申し上げたために、

中宮も御心配をあそばし、帝みかども常から宮のお身持ちを気づかわしく思召していられたのであつたから、これによつていつそう監視が嚴重になり、兵部卿の宮を宮中から一步もお出しにならぬような計らいをあそばされた。そして左大臣の六女との結婚はお諾ゆるしにならなかつた宮へ、強制的にその人を夫人になさしめたもうと  
いうようなこともお定めになつた。中納言はそれを聞いて憂鬱ゆううつになつていた。自分があまりに人と変わり過ぎているのである、  
どんな宿命でか八の宮が姫君たちを気がかりに仰せられた言葉も  
忘れなかつたし、またその女王たちもすぐれた女性であるのを

発見してからは、世間に無視されていることがあまりに不合理に惜しいことに思われ、人の幸福な夫人にさせたいことが念頭を去らなかつたし、ちようど兵部卿の宮も熱心に希望あそばされたことであつたために、自分の対象とする姫君は違つてゐるのに、今一人の女王を自分に娶めとらせようと当の人がされるのをうれしくなく思うところから、宮とその方とを結ばせてしまった。今思うとそれは軽率なことであつた。二人とも自分の妻にしても非難する人はなかつたはずである、今さら取り返されるものではないが、愚かしい行動をしたと煩悶はんもんをしているのである。

宮はまして宇治の女王によおうがお心にかからぬ時とてもなかつた。恋しくお思いになり、知らぬまにどんなことになつてゐるかもし

れぬという不安もお覚えになるのである。

「非常にお気に入った人がおありになるのだったら、私の女房の一人にしてここへ来させて、目だたない愛しようをしていれればいいでしょう。あなたは東宮様、二の宮さんに続いて特別なものとして未来の地位をお上かみはお考えになつていらつしやるのですから、軽率な恋愛問題などを起こして、人から指弾されるのはよろしくありませんからね」

こんなふうちゆうぐうに中宮ちゆうぐうは始終御忠告をあそばされるのであつた。はげしく時雨しぐれが降つて御所へまいる者も少ない日、兵部卿の宮は姉君によいちの女みや一の宮の御殿へおいでになつた。お居間に侍している女房の数も多くなくて、姫君は今静かに絵などを御覧になつて

いるところであつた。几帳きちようだけを隔てにしてお二方はお話しになつた。限りもない気品のある貴女きじよらしさとともに、なよなよとした柔らかさを備えたもうた姫宮を、この世にこれ以上の高華な美を持つ女性はなからうと、昔から兵部卿の宮は思つておいでになつて、これに近い人というのは冷泉院れいぜいの内親王だけであろうと信じておいでになり、世間から受けておいでになる尊敬の度も、御容姿も、御聡明そうめいさも人のお噂する言葉から想像されて、宮の覚えておいでになる院の宮への恋を、なんらお通じになる機会と  
いうものがなく、しかも忘れる時なく心に持つておいでになる兵部卿の宮なのであるが、あの宇治の山里の人の可憐かれんで高い気品の備わつたところなどは、これらの最高の貴女に比べても劣らない

であろうと、姉君のお姿からも中の君が聯想れんそうされて、恋しくて  
 ならず思召す心の慰めに、そこに置かれてあつたたくさんな絵を  
 見ておいでになると、美しい彩色絵の中に、恋する男の住居すまいなど  
 を描いたのがあつて、いろいろな姿の山里の風景も添っていた。  
 恋人の宇治の山荘の景色けしきに似たものへお目がとまつて、姫君の御  
 了解を得てこの絵は中の君へ送つてやりたいと宮はお思いになつ  
 た。伊勢物語いせを描いた絵もあつて、妹に琴を教えていて、「うら  
 若みねよげに見ゆる若草を人の結ばんことをしぞ思ふ」と業平なりひら  
 が言っている絵をどんなふううに御覧になるかと、お心を引く気にな  
 たりになり、少し近くへお寄りになつて、

「昔の人も同胞きょうだいは隔てなく暮らしたものですよ。あなたは物

足らないお扱いばかりをなさいますが」

とお言いになったのを、姫宮はどんな絵のことかと思召すふうであつたから、兵部卿の宮はそれを巻いて几帳きちようの下から中へお押しやりになつた。下向きになつてその絵を御覧になる一品いっほんの宮みやのお髪ぐしが、なびいて外へもこぼれ出た片端に面影を想像して、この美しい人が兄弟でなかつたならという心持ちに匂宮におうみやはなつておいでになつた。おさえがたいそうした気分から、

若草のねみんものとは思はねど結ぼほれたるここちこそすれ

こんなことを申された。姫宮に侍している女房たちは匂宮の前



へ出るのをことに恥じて皆何かの後ろへはいつて隠れているのである。ことによるではないか、不快なことを言うものであると思召す姫宮は、何もお言いにならないのであった。この理由から「うらなく物の思はるるかな」と答えた妹の姫も蓮葉はすはな気があそばされて好感をお持ちになることができなかつた。六条院の紫夫人が宮たちの中で特にこのお二人を手もとでおいつくしみしたのであつたから、最も親しいものにして双方で愛しておいでのになつた。姫宮を中宮は非常にお大事にあそばして、よきが上にもよくおかしずきになるならわしから、侍女なども精選して付けておおりになつた。少しの欠点でもある女房は恥ずかしくしてお仕えができにくいのである。貴族の令嬢が多く女房になつていた。移りや

すい心の ひようぶぎよう兵部卿の宮は、そうした中に物新しい感じのされる人を情人にお持ちになりなどして、宇治の人をお忘れになるのではないながらも、逢あいに行こうとはされずに日がたつた。

待つほうの人からいえば、これが長い時間に思われて、やはりこんなふうにして忘られてしまうのかと、心細く物思**い**ばかりがされた。そんなころにちようど中納言が訪たずねて来た。総角あげまきの姫君が病気になつたと聞いて見舞いに来たのである。ちよつとしたことにもすぐ影響が現われてくるというほどの病体ではなかつたが、姫君はそれに託して対談するのを断わつた。

「おしらせを聞くとすぐに、驚いて遠い路みちを上がった私なので、から、ぜひ御病床の近くへお通しく下さい」

と言つて、不安でこのままでは帰れぬふうを見せるために、女王の病室の御簾みすの前へ座が作られ、薰かおるはそこへ行つた。困つたことであると姫君は苦しがつていたが、そう冷ややかなふうは見せるのでもなかつた。頭を枕まくらから上げて返辞などをした。宮が御意志でもなくお寄りにならなかつた紅葉もみじの船の日のことを薰は言い、「気永きながに見ていてください。はらはらとお心をつかつてお恨みしたりなさらないように」

などと教えるようにも言う。

「私は格別愚痴をこぼしたりはいたしません、亡なくなられました宮様が、御教訓を残してお置きになりましたのは、こうしたこともあらせまい思召しかと思ひまして、あの人がかわいそうでご

ございます」

それに続いて大姫君の歎くけはい気配がした。心苦しくて、薫は自身すらも恥ずかしくなって、

「人生というものは、何も皆思いどおりにいくものではありませんからね。そんなことには少しも経験をお持ちにならないあなたがたにとっては、恨めしくばかりお思われになることもあるでしょうが、まあしいてもそれを静めて時をお待ちなさい。決してこのまま悪くなっていく御縁ではないと私は信じています」

などと言いながらも、自身のことでなく他の人の恋でこの弁明はしているのであると思うと、奇妙な気がしないでもなかつた。夜になるときまって苦しくなる病状であつたから、他人が病室の

近くに来ていることは中の君が迷惑することと思つて、やはりいつもの客室のほうへ寢床をしつらえて人々が案内を申し出るのであつたが、

「始終気がかりでならなく思われる方が、ましてこんなふうにお悪くなつておいでになるのを聞くと、すぐにも上がった私を、病室からお遠ざけになるのは無意味ですよ。こんな場合のお世話なんぞも、私以外のだれが行き届いてできますか」

などと、老女の弁に語つて、始めさせる祈禱きとうについての計らいも薰はした。そんなことは恥ずかしい、死にたいときえ思うほどの無価値な自分ではないかと大姫君は聞いていて思うのであつたが、好意を持つてくれる人に対して、思いやりのないように思わ

れるのも苦しくて、まあ生きていてもよいという気になったという、こんな、優しい感情もある女王なのであった。

次の朝になって、薫のほうから、

「少し御気分はおよろしいようですか。せめて昨日ほどきのうにでもしてお話がしたい」

と、言つてやると、

「次第に悪くなつていくのでしょうか、今日はたいへん苦しゅうございます。それではこちらへ」

という挨拶あいさつがあつた。中納言は哀れにそれを聞いて、どんなふうにも苦しいのであろうと思ひ、以前よりも親しみを見せられるのも悪くなつていく前兆ではあるまいかと胸騒ぎがし、近く寄つ

て行きいろいろな話をした。

「今私は苦しくてお返辞ができません。少しよくなりましたらねえ」

こうかすかな声で言う哀れな恋人が心苦しくて、薫は歎息たんそくをしていた。さすがにこうしてずっと今日もいることはできない人であったから、気がかりにしながらも帰京をしようとして、

「こういう所ではお病氣の際などに不便でしかたがない。家を変えてみる療法に託してしかるべき所へ私はお移ししようと思う」

などと言い置き、御寺みでらの阿闍梨あじやりにも熱心きとうに祈禱きとうをするように告げさせて山荘を出た。

薫の従者でたびたびの訪問について来た男で山荘の若い女房と

情人關係になつた者があつた。二人の中の話に、兵部卿の宮には監視がきびしく付き、外出を禁じられておいでになることを言い、「左大臣のお嬢さんと御結婚をおさせになることになつてゐるのだが、大臣のほうでは年来の志望が達せられるので二つ返辞というものなのだから、この年内に実現されることだろう。宮はその話に気がお進みにならないで、御所の中でほうじゆう放かみ縦なな生活をして楽しんでおいでになるから、お上かみや中宮様の御処置も当を得なかつたわけになるのだね。自家うちの殿様は決してそんなのじゃない、あまりまじめ過ぎる点で皆が困つてゐるほどなのだ。ここへこうたびたびおいでになることだけが驚くべき御執心を一人の方に持つておられると言つてだれも感心していることだ」



とも言った。こんな話を聞きましたと、その女が他の女房たちの中で語っているのを中の君は聞いて、ふさがり続けた胸がまたその上にもふさがって、もういよいよ自分から離れておしまいになる方と解釈しなければならぬ、りっぱな夫人をお得になるまでの仮の恋を自分へ運んでおいでになったにすぎなかつたのであらう、さすがに中納言などへのはばかりで手紙だけは今でも情のあるようなことを書いておよこしになるのであらうと考えられるのであつたが、恨めしいと人の思うよりも、恥ずかしい自身の置き場がない気がして、しおれて横になつていた。病女王はそれが耳にはいつた時から、いつそうこの世に長くいたいとは思われなくなつた。つまりぬ女たちではあるが、その人たちもどんなにこ

の始末を嘲ちやうしやう笑しやうして思っているかもしれないと思われる苦しきから、聞こえぬふうをして寝ているのであった。中の君は物思いをする人の姿態といわれるかいなまくら肱を枕にしたうたた寝をしているのであるが、その姿が可憐かれんで、髪が肩の横にたまっているところなどの美しいのを、病女によお王はながめながら、親のいさめ（たらちねの親のいさめしうたた寝云々）の言葉というものがかえすがえす思おい出されて悲しくなり、あの世の中でも罪の深い人の墮おちる所へ父君は行つておいではなるまい、たとえどこにもせよおいでになる所へ自分を迎えてほしい、こんなに悲しい思いばかりを見ている自分たちを捨ててお置きになつて、父君は夢にさえも現われてきてはくさらないではないかと思ひ續けて、夕方の空の色が

すぐくなり、時雨しぐれが降り、木立ちの下を吹き払う風の音を寂しく聞きながら、過去のことに、のちの日のことをはかなんで病床にいる姿には、またもない品よさが備わり、白の衣服を着て、頭は梳すくこともしないのであるが、もつれたところもなくきれいに筋がそろったまま横に投げやりになっている髪の色に少し青みのできたのも艶えんな趣を添えたと見える。目つき額つきの美しさはすぐれた女の顔というもののよくわかる人に見せたいようであった。うたた寝していたほうの女王は、荒い風の音に驚かされて起き上がった。山吹やまぶきの色、淡うすむらさき紫などの明るい取り合わせの着物は着ていたが顔はまたことさらに美しく、染めたように美しく、花々とした色で、物思いなどは少しも知らぬというようにも見え

た。

「お父様を夢に見たのですよ。物思わしそうにして、ちようごこの辺の所においでになりましたわ」

と言うのを聞いて病女王の心はいっそう悲しくなつた。

「お亡<sup>かく</sup>れになつてから、どうかして夢の中でもお逢<sup>あ</sup>いしたいと私はいつも思っているのに少しも出ておいでにならないのですよ」

と言つたあとで、二人は非常に泣いた。このごろは明け暮れ自分<sup>分</sup>が思っているのであるから、ふと出ておいでになることもあつたのであろう、どうしても父君のおそばへ行きたい、人の妻にもならず、子なども持たない清い身を持ってあの世へ行きたい、と大姫君は来世のことまでも考えていた。支<sup>し</sup>那<sup>な</sup>の昔にあつたという

反魂はんこんこう香も、恋しい父君のためにほしいとあこがれていた。暗く  
なつてしまったところに兵部卿の宮のお使いが来た。こうした一瞬  
間は二女王の物思いも休んだはずである。中の君はすぐに読もう  
ともしなかった。

「やっぱりおとなしくおおような態度を見せてお返事を書いてお  
あげなさい。私がこのまま亡くなれば、今以上にあなたは心細い  
境遇になつて、どんな人の媒介役を女房が勤めようとするかもし  
れないのですからね。私はそれが気がかりで、心の残る気もしま  
すよ。でもこの方が時々でも手紙を送つておいでになるくらい  
の関心をあなたに持つていらつしやる間は、そんな無茶なことをし  
ようとする女もなかりうと思つと、恨めしいながらもなお頼みに

されますよ」

と姫君が言うのと、

「先に死ぬことなどをお思いになるのはひどいお姉様。悲しいではありませんか」

中の君はこう言つて、いよいよ夜着の中へ深く顔を隠してしまつた。

「自分の命が自分の思うままにはならないのですからね。私はあの時すぐにお父様のあとを追つて行きたかつたのだけれど、まだこうして生きているのですからね。明日はもう自分と関係のない人生になるかもしれないのに、やはりあとのことで心を苦しめていきますのも、だれのために私が尽くしたいと思うからでしょう」

と大姫君は灯を近くへ寄せさせて宮のお手紙を読んだ。いつものようにこまやかな心が書かれ、

ながむるは同じ雲井をいかなればおぼつかなさを添ふる時雨  
ぞ

とある。袖を涙で濡らすというようなことがあの方にあるのであろうか、男のだれもが言う言葉ではないかと思ながらも怨めしさはまさっていくばかりであった。

世にもまれな美男でいらせられる方が、より多く人に愛されようとうと艶えんに作っておいになるお姿に、若い心の惹ひかれていぬわけ

はない。隔たる日の遠くなればなるほど恋しく宮をお思いするのは中の君であつて、あれほどに、あれほどな誓言までしておいでになつたのであるから、どんなことがあつてもこのままよその人になつておしまいになることはあるまいと思いかえす心が常に横にあつた。お返事を今夜のうちにお届けせねばならぬと使いが急がし立てるために、女房が促すのに負けて、ただ一言だけを中の君は書いた。

あられ降る深山みやまの里は朝夕にながむる空もかきくらしつつ

それは十月の三十日のことであつた。



逢あわぬ日が一月以上になるではないかと、宮は自責を感じてお  
 いでになりながら、今夜こそ今夜こそと期しておいでになつても、  
 障さわりが次から次へと多くてお出かけになることができないうちに、  
 今年の五節ごせちは十一月にはいつてすぐになり、御所辺の空気ははな  
 やかなものになつて、それに引かれておいでになるといふのも  
 なく、わざわざ宇治をお訪たずねになろうとしないのでもなく、日が  
 紛れてたつていく。

この間を宇治のほうではどんなに待ち遠に思ったかしのれない。  
 かりそめの情人をお作りになつてもそんなことで慰められておい  
 でになるわけではなく、宮の恋しく思おぼしめ召す人はただ一人の中の  
 君であつた。左大臣家の姫君との縁組みについて、中ちゆうぐう宮も今

では御讓歩をあそばして、

「あなたにとつて強大な後援者を結婚で得てお置きになつた上で、そのほかに愛している人があるなら、お迎えになつて重々しく夫人の一人としてお扱いになればよろしいではないか」

と仰せられるようになったが、

「もうしばらくお待ちください。私に考えがあるのですから」

となおいなみ続けておいでになる兵部卿の宮であつた。かりそめの恋人は作つても、勢いのある正妻などを持つてあの人に苦ししい思いはさせたくないと言宮の思つておいでになることなどは、宇治へわからぬことであつたから、月日に添えて物思いが加わるばかりである。

かおる

薫も宮を自分の観察していたよりも軽薄なお心であつた、世間で見ていゝような方ではないとお信じ申して、宇治の女王たちへ取りなしていたのが恥ずかしくなり、女のほうを心からかわいそうに思つて、あまり宮へ近づいてまいらないようになった。そして山莊のほうへは病む女王の容体を聞きにやることを怠らなかつた。

十一月になつて少しよいという報告を薫は得ていて、それがちやうど公私の用の繁多な時であつたため、五、六日見舞いの使ひを出さずにいたことを急に思い出して、まだいろいろな用があつたのも捨てておいて自身で出かけて行つた。祈<sup>きとう</sup>禱は恢<sup>かい</sup>復<sup>ふく</sup>するまでとこの人から命じてあつたのであつたのに、少し快いようにな

つたからといって阿闍梨あじやりも寺へ歸してあつた。それで山莊のうち  
 はいつそう寂寞せきばくたるものになつていた。例の弁が出て来て病女  
 王のことを報告した。

「どこがお痛いというところもございませぬような、御大病とは  
 思えぬ御容体でおありになりながら、物を少しも召し上がらない  
 のでございますよ。だいたい御體質が纖弱でいらつしやいますと  
 ころへ、ひょうぶきよう兵部卿の宮様のことが起こつてまいりましてからは、  
 ひどく物思いをばかりなさいます方におなりになりました、ちよ  
 っとしたお菓子をさえも召し上がろうとはなさらなかつたおせい  
 でございますよ、御衰弱がひどうございましてね、頼み少ないふ  
 うになつておしまいになりました。私は情けないながいき長命をいたし

まして、悲しい目にあいますより前に死にたいと念じているので  
「ございます」

と言ひ終えることもできぬように泣くのが道理に思われた。

「なぜそれをどなたもどなたも私へ知らせてくださらなかつたの  
ですか。冷泉院れいぜいのほうにも御所のほうにもむやみに御用の多い  
幾日だったものですから、私のほうの使いも出しかねていた間に、  
ずいぶん御心配していたのです」

と言つて、この前の病室にすぐ隣つた所へはいつて行つた。まくら枕  
に近い所に坐ざして薫はものを言うのであつたが、声もなくなつた  
ようで姫君の返辞を聞くことができない。

「こんなに重くおなりになるまで、どなたもおしらせくださらな

かつたのが恨めしい。私がどんなに御心配しているかが、皆さんに通じなかつたのですか」

と言ひ、まず御寺の阿闍梨みでら あじやり、それから祈禱きとうに効験のあると言わ

れる僧たちを皆山莊へ薫は招いた。祈禱と読どきよう経を翌日から始め

させて、手つだいの殿上役人、自家の侍たちが多く呼び寄せられ、

上下の人が集まつて来たので、前日までの心細げな山莊の光景は

跡もなく、頼もしく見られる家となつた。日が暮れると例の客室

へ席を移すことを女房たちは望み、湯漬ゆづけなどのもてなしをしよ

うとしたのであるが、来ることのおくれた自分は、今はせめて近

い所にいて看病がしたいと薫は言ひ、南の縁付きの室まは僧の室へやに

なつていたから、東側の部屋へやで、それよりも病床に密接している

所に屏風びょうぶなどを立てさせてはいった。これを中の君は迷惑に思つたのであるが、薫と姫君との間柄に友情以上のものが結ばれていることと信じている女房たちは、他人としては扱わないのであつた。

初夜から始めさせた法華經ほけきょうを続けて読ませていた。尊い声を持った僧の十二人のそれを勤めているのが感じよく思われた。灯ひは僧たちのいる南の室まにあつて、内側の暗くなっている病室へ薫はすべり入るように行つて、病んだ恋人を見た。老いた女房の二、三人が付いていた。中の君はそつと物蔭ものかげへ隠れてしまつたのであつたから、ただ一人床上に横たわつている総角あげまきの病女あ王のそばへ寄つて薫は、

「どうしてあなたは声だけでも聞かせてくださらないのですか」と言つて、手を取つた。

「心ではあなたのおいでになつたことがわかつていながら、ものを言うのが苦しいものですから失礼いたしました。しばらくおいでにならないものですから、もうお目にかかれないうままで死んで行くのかと思つていました」

息よりも低い声で病者はこう言つた。

「あなたにさえ待たれるほど長く出て来ませんでしたね、私は」  
しやくり上げて薫は泣いた。この人の頬ほおに触れる髪の毛が熱で少し熱くなつていた。

「あなたはなんとという罪な性格を持つておいでになつて、人をお



悲しませになつたのでしよう。その最後にこんな病氣におなりになつた」

耳に口を押し当てていろいろと薫が言ふと、姫君はうるさくも恥ずかしくも思つて、袖そでで顔をふさいでしまった。平生よりもなおなよなよとした姿になつて横たわつているのを見ながら、この人を死なせたらどんな気持ちができるであろうと胸も押しつぶされたように薫はなつていた。

「毎日の御介かいほう抱かが、御心配といつしよになつてたいへんだつたでしよう。今夜だけでもゆつくりとお休みなさい。私がお付きしていますから」

見えぬ蔭にいる中の君に薫がこう言ふと、不安心には思いなが

らも、何か直接に話したいことがあるのであろうと思つて、若いによおう女王は少し遠くへ行つた。真向まっこううへ顔を持つてくるのでなくとも、近く寄り添つて来る薫に、大姫君は羞しゆうち恥を覚えるのであつたが、これだけの宿縁はあつたのであろうと思ひ、危険な線は踏み越えようとしなかつた同情の深さを、今一人の男性に比べて思うと、一種の愛はわく姫君であつた。死んだあとの思い出にも氣強く、思いやりのない女には思われまいとして、かたわらの人を押しやろうとはしなかつた。

一夜じゆうかたわらにいて、時々湯なども薫は勧めるのであつたが、少しもそれは聞き入れなかつた。悲しいことである、この命をどうして引きとめることができるであらうと薫は思ひ悩む

のであつた。不断經を読む僧が夜明けごろに人の代わる時しばらく前の人と同音に唱える經声が尊く聞こえた。阿闍梨あじやりも夜居よいの護持僧を勤めていて、少し居眠りをしたあとでさめて、陀羅尼だらにを読み出したのが、老いたしわがれ声ではあつたが老巧者らしく頼もしく聞かれた。

「今夜の御様子はいかがでございますか」

などと阿闍梨は薫に問うたついでに、

「宮様はどんな所においでになりました。必ずもう清浄な世界においでになると私は思っているのですが、先日の夢にお見上げすることができまして、それはまだ俗のお姿をしていられまして、人生を深くいとわしい所と信じていたから、執着の残ることは何

もなかつたのだが、少し心配に思われる点があつて、今しばらくの間志す所へも行きつかずにいるのが残念だ。こうした私の気持ちを救うような方法を講じてくれとはつきりと仰せられたのですが、そうした場合に速く何をしてよろしいか私にはよい考えが出ないものですから、ともかくもできますことと思ひまして、修行の弟子<sup>でし</sup>五、六人にある念仏を続けさせております。それからまた気づきまして常<sup>じょうふきよう</sup>不<sup>ふ</sup>軽<sup>きやう</sup>の行ないに弟子を歩かせております」

こんなことを言うのを聞いて薫は非常に泣いた。父君の成<sup>じやうぶ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>の道の妨げをさえしているかと病女王もそれを聞いて、そのまま息も絶えんばかりに悲しんだ。ぜひとも父君がまだ冥府<sup>めいふ</sup>の道をさまよつておいでになるうちに自分も行つて、同じ所へまいり

たいと思うのであった。阿闍梨は多く語らずに座を立つて行つた。

この常不輕ぎよろうの行はこの辺の村々をはじめとして、京の町々にまでもまわつて家々の門かどに額を突く行であつて、寒い夜明けの風を避けるために、師の阿闍梨あじやりのまいつている山莊へはいり、中門の所へすわつて回向えこうの言葉を述べているその末段に言われることが、故人の遺族の身にしみじみとしむのであつた。客である中納言も仏に帰依する人であつたから、これも泣きながら聞いていた。

中の君が姉君を気づかわしく思うあまりに病床に近く来て、奥のほうの几帳きちようの蔭かげに來ている氣配けはいを薰は知り、居ゐずまいを正して、

「不輕の声をどうお聞きになりましたか、おごそかな宗派のほう

ではしないことですが尊いものですね」

と言い、また、

霜さゆる汀の千鳥うちわびて鳴く音悲しき朝ぼらけかな  
みぎは

これをただ言葉のようにして言った。

恨めしい恋人に似たところのある人とは思うが返辞の声は出しかねて、弁に代わらせた。

あかつきの霜うち払ひ鳴く千鳥もの思ふ人の心をや知る

あまりに似合わしくない代わり役であつたが、つたなくもない声こわづかいで弁はこの役を勤めた。こうした言葉の贈答にも、遠慮深くはありながらなつかしい才気のおいの覚えられるこの女王とも、姉女王を死が奪つたあとではよそよそになつてしまわねばならぬではないか、何もかも失うことになればどんな気がするであらうと薫は恐ろしいことのようにさえ思つた。阿闍梨の夢に八の宮が現われておいでになつたことを思つても、このいたましい二人の女王があゝの世からお気がかりにお見えになることかもしれないと思われる薫は、山の御寺みでらへも誦經ずきようの使いを出し、そのほかの所々へも誦經どきようをさせる使いをすぐに立てた。宮廷のほうへも私邸のほうへもお暇いとまを乞こい、神々への祭り、祓はらいまでも隙ひまなくさせ

て姫君の快癒かいゆのみ待つ薫であつたが、見えぬ罪により得ている病ではないのであつたから、効驗は現われてこなかつた。病者自身が、生かしてほしいと仏に願つておればともかくであるが、女王にすれば、病になつたのを幸いとして死にたいと念じていることであるから、祈祷きとうの効目ききめもないわけである。死ぬほうがよい、中納言がこうしてつききりになつていて介抱かいほうをされるのでは、癒なおつたあとの自分はその妻になるよりほかの道はない、そうかといつて、今見る熱愛とのちの日の愛情とが変わり、自分も恨むことになり、煩悶はんもんが絶えなくなるのはいとわしい。もしこの病で死ぬことができなかつた場合には、病身であることに託して尼になろう、そうしてこそ互いの愛は永久に保たれることになるのである



るから、ぜひそうしなければならぬと姫君は深く思うようになって、死ぬにしても、生きるにしても出家のことはぜひ実行したいと考えるのであるが、そんな賢げに聞こえることは薫に言い出されなくて、中の君に、

「私の病気は癒るのでないような気がしますからね、仏のお弟子でしになることによつて、命の助かる例もあると言いますから、あなたからそのことを阿闍梨に頼んでください」

こう言つてみた。皆が泣いて、

「とんでもない仰せでございます。あんなに御心配をしていらつしやいます中納言様がどれほど御落胆あそばすかしれません」

だれもこんなことを言つて、唯一の庇護者ひごしやである薫かおるにこの望み

を取り次ごうとしないのを病女王は残念に思っていた。

女王の病のために薫が宇治に滞在していることを、それからそれへと話に聞き、慰問にわざわざ来る人もあった。深く愛している様子を察している部下の人、家職の人たちはいろいろの祈禱を依頼しにまわるのに狂奔していた。

今日は五節ごせちの当日であると薫は京を思いやっていた。風がひどくなり、雪もあわただしく降り荒れていた。京の中の天気はこんなでもあるまいかと切実に心細さを感じていた薫は、この人と夫婦になれずに終わるのであるかと考えられる点に、運命の恨めしきさはあったが、そんなことは今さら思うべきでない、なつかしい可憐かれんなふうで、ただしばらくでも以前のようと思うことの言い

合える時があればいいのであるがと物思わしくしていた。明るくならないままで日が暮れた。

かきくもり日かげも見えぬ奥山に心をくらすころにもあるかな

薫の歌である。この人のいてくれるのをだれも力に頼んでいた。いつもの近い席に薫がいる時に、几帳きちょうなどを風が乱暴に吹き上げるため中の君は向こうのほうへはいった。老いた女房などもきまり悪がつて隠れてしまった間に、近々と病床へ薫は寄つて、

「どんな御気分ですか、私が精神を集中して快くおなりになるの

を祈っているのに、その効かいがなくて、もう声すら聞かせていただけなくなつたのは悲しいことじゃありませんか。私をあとに残して行つておしまいになつたらどんなに恨めしいでしょう」

泣く泣くこう言つた。もう意識もおぼろになつたようでありながら女王は薫のけはいを知つて袖そでで顔をよく隠していた。

「少しでもよろしい間があれば、あなたにお話し申したいこともあるのですが、何をしようとしても消えていくようにばかりなさるのは悲しゆうございます」

薫を深く憐あわれむふうのあるのを知つて、いよいよ男の涙はとめどなく流れるのであるが、周囲で頼み少なく思つていとは知らせたくないと思つて慎もうとしても、泣く声の立つのをどうしよう

もなかつた。自分とはどんな宿命で、心の限り愛していながら、恨めしい思いを多く味わわせられるだけでこの人と別れねばならぬのであろう、少し悪い感じでも与えられれば、それによつてせめても失う者の苦しみをなだめることになるであらう、と思つて見つめる薫であつたが、いよいよ可憐かれんで、美しい点ばかりが見いだされる。腕かいななども細く細く細くなつて影のようにはかなくは見えながらも色合いが変わらず、白く美しくなよなよとして、白い服の柔らかかなのを身につけ夜着は少し下へ押しやつてある。それはちようど中に胴ひなというもののない雛人形を寝かせたようなのである。髪は多すぎるとは思われぬほどの量かさで床の上にあつた。枕まくらから下がつたあたりがつやつやと美しいのを見ても、この人がど

うなつてしまうのであろう、助かりそうも見えぬではないかと限りなく惜しまれた。長く病びようが臥がしていて何のつくろいもしていない人が、盛装して氣どつた美人というものよりはるかにすぐれていて、見ているうちに魂も、この人と合致するために自分を離れて行くように思われた。

「あなたがいよいよ私を捨ててお行きになることになつたら、私も生きていませんよ。けれど、人の命は思うようになるものでなく、生きていねばならぬことになりましたら、私は深い山へはいつてしまおうと思います。ただその際にお妹様を心細い状態であとへお残しするだけが苦痛に思われます」

中納言は少しでもものを言わせたいために、病者が最も関心を

持つはずの人のことを言ってみると、姫君は顔を隠していた袖をそで少し引き直して、

「私はこうして短命で終わる予感があったものですから、あなたの御好意を解しないように思われますのが苦しくて、残っていく人を私の代わりと思ってくださいるようとそう願っていたのですが、あなたがそのとおりにしてくださいましたら、どんなに安心だったかと思ひましてね、それだけが心残りで死なれない気もいたします」

と言った。

「こんなふうには悲しい思いばかりをしなければならぬのが私の宿命だったのでしよう。私はあなた以外のだれとも夫婦になる気

は持つてなかつたものですから、あなたの好意にもそむいたわけなのです。今さら残念であの方がお気の毒でなりません。しかし御心配をなさることはありませんよ。あの方のことは」

などともなだめていた薫は、姫君が苦しそうなふうであるのを見て、修法の僧などを近くへ呼び入れさせ、効験をよく現わす人々に加持をさせた。そして自身でも念じ入っていた。人生をことさらいとわしくなっている薫でないために、道へ深く入れようとされる仏などが、今こうした大きな悲しみをさせるのではなからうか。見ているうちに何かの植物が枯れていくようにあげまき総角の姫君の死んだのは悲しいことであつた。引きとめることもできず、あしず足摺りしたいほどに薫は思い、人が何と思うともはばかる気はな



くなつていた。臨終と見て中の君が自分もともに死にたいとはげしい悲嘆にくれたのも道理である。涙におぼれている女王を、例の忠告好きの女房たちは、こんな場合に肉親がそばで歎くのはよろしくないことになつていると言つて、無理に他の室へ伴つて行つた。

源中納言は死んだのを見ていても、これは事実でないであろう、夢ではないかと思つて、台の灯を高く掲げて近くへ寄せ、恋人をながめるのであつたが、少し袖で隠している顔もただ眠つていよう、変わったと思われるところもなく美しく横たわっている姫君を、このままにして乾燥した玉虫の骸のように永久に自分から離さずに置く方法があればよいと、こんなことも思つた。遺骸

として始末するため、人が髪を直した時に、さつと芳香が立った。それはなつかしい生きていた日のままのにおいであつた。どの点でこの人に欠点があるとしてのけにくい執着を除けばいいのであろう、あまりにも完全な女性であつた。この人の死が自分を信仰へ導こうとする仏の方便であるならば、恐怖もされるような、悲しみも忘れられるほど変相を見せられたいと仏を念じているのであるが、悲しみはますます深まるばかりであつたから、せめて早く煙にすることをしようと思ひ、葬送の儀式のことなどを命じてさせるのもまた苦しいことであつた。空を歩くような気持ちを覚えて薫は葬場へ行つたのであるが、火葬の煙さえも多くは立たなかつたのにはかなさをさらに感じて山莊へ歸つた。

忌籠りきこもする僧の数も多くて、心細さは少し慰むはずであったが、中の君はだれにもだれにも先立たれた不幸な女として人から見られるのすら恥ずかしいと思ひ沈んでいて、この人も生きた姫君とは思われないほどであった。ひょうぶきよう兵部卿の宮からも御慰問の品々が贈られたのであるが、恨めしいと思ひ込んだ姉君の気持ちを、ついに緩和させずじまいになされた方だと思つと、中の君はお受けしてうれしいとは思わなかつた。

中納言は人生の悲しみを切実に味わつた今度のことを機会に、出家したいと思ふ心はあるのであるが、三条の母宮の思召しもはばかられ、それとこの中の君の境遇の心細さは見捨てられないものに思われて煩悶はんもんをしながら、故女王にょおうの言つたとおりに、短

命で死ぬ人の代わりに中の君を娶めとるのもよかつた、自分の身を分けた同じものに思えと言われても、恋の相手を変える氣にその當時の自分はなれなかつた、こんな孤独の人にして物思いをさせるのであつたなら、故人を忍ぶ相手として二人で語り合う身になつておればよかつたのであるとも思つた。かりそめにも京へ出ることをせず、物思いをしてもつてゐることを知つて、世間の人も故人を薰が深く愛していたことを知り、宮中をはじめとして諸方面からの慰問の使いが山莊を多く訪おとずれた。

女王の歿ぼつご後の日はずんずんとたつていく。七日七日の法要にも尊いことを多くして志の深い弔いを故人のために怠らぬ源中納言も、妻を失おつとつた良人でないため喪服は着けることのできないため、

ことに大姫君を尊敬して仕えた女房らの濃い墨染めの袖そでを見ても、

くれなゐに落つる涙もかひなきはかたみの色を染めぬなりけり

こんなことがつぶやかれ、浅い紅くれないの下の単衣ひとえの袖を涙に濡ぬらし  
ているこの人は、あくまで艶えんできれいであつた。女房たちがのぞ  
きながら、

「姫君のお亡かくれになつた悲しみは別として、この殿様がこちらに  
ずっとおいでくださいますことに私たちはもう馴ならされていて、  
忌が済んでお帰りになることを思うと、お別れが惜しくて悲しい

ではありませんか。なんという宿命でしょう。こんなに真心の深い方をお二方とも御冷淡になすつて、御縁をお結びにならなかつたとはね」

とも言つて泣き合つていた。

「こちらの姫君をあの方のお形見とみなして、今後はいろいろ昔の話を申し上げ、また承りもしたいと思うのです。他人のように思召さないでください」

と薫は中の君へ言わたが、すべての点で自分は薄命な女であると思う心から恥じられて、中の君はまだ話し合おうとはしなかつた。この女王のほうはあざやかな美人で、娘らしいところと、<sup>けだか</sup>気高いところは多分に持つていたが、なつかしい柔らかな<sup>じょうじ</sup>嫺

々<sup>よう</sup>たる美というものは故人に劣つていと事に触れて薫は思つた。

雪の暗く降り暮らした日、終日物思いをしていた薫は、世人が愛しにくいものに言う十二月の月の冴<sup>さ</sup>えてかかった空を、御<sup>み</sup>簾<sup>す</sup>を巻き上げてながめていると、御<sup>み</sup>寺<sup>てら</sup>の鐘の音が今日も暮れたとかすかに響いてきた。

おくれじと空行く月を慕ふかな終<sup>つ</sup>ひにすむべきこの世ならねば

風がはげしくなったので、揚げ戸を皆おろさせるのであつたが、

四辺の山影をうつした宇治川の汀の氷に宿っている月が美しく見えた。京の家の作りみがいた庭にもこんな趣きは見がたいものであるがと薫は思った。病体にもせよあの人が生きていてくれたならば、こんな景色も共にながめて語ることができたであろうと思うと、悲しみが胸から外へあふれ出すような気がした。

恋ひわびて死ぬる葉のゆかしきに雪の山には跡を消なまし

死を求める雪山童子が鬼に教えられた偈の文も得たい、それを唱えてこの川へ身を投げ、亡き人に逢おうと薫が思ったというのは、あまりに未練な求道者といふべきである。



中納言は女房たちを皆そばへ呼び集めて、話などをさせて聞いていた。様子のりっぱであることと、親切な性情を知っている女たちであるから、その中の若い人らは身にしむほどの思いで好意を持った。老いた人たちは薫を見ることによっても故人が惜しまれてならなかった。

「御病気の重くなりましたのも、ひょうぶぎよう兵部卿の宮様のお態度に失

望をなさいまして、世間体も恥ずかしいとお思ひになりますのを、さすがに中の君様には、それほどにまで思召すとはお隠しになりました、ただお一人心中でだけ世の中を悲観し続けていらつしやいますうちに、お食欲などもまるでなくなつておしまひになりました、御衰弱に御衰弱が重なつてまいつたようでございます。

表面には物思いをあそばすふうをお見せにならずに、深く胸の中  
で悩んでいらつしつたのでございます。それに中の君様に結婚を  
おさせになりましたことは父宮様の御遺戒にもそむいたことであ  
つたと、いつもそれをお心の苦になさいましたのでございますよ」  
こんなことを言つて、いつの時、いつかこうお言いになつたこ  
とがあるなどと大姫君のことを語つて、だれもだれも際限なく泣  
いた。自分の計らいが原因して苦しい物思いを故人にさせたと、  
あやまちを取り返しうるものなら取り返したく思つて薫は聞いた  
のであつて、恋人の死そのものだけでなく、すべての人生が恨め  
しく、ねんず念誦を哀れなふうにしていて、眠りについたらかと思つたとま  
たすぐに目ざめていた。

この早朝の雪のけ気の寒い時に、人声が多く聞こえてきて、馬の脚あしおと音さえもした。こうした未明に雪を分けてだれも山莊へ近づかずがないと僧たちもそれを聞いて思っていると、それは目だたぬ狩かりぎぬ衣姿で兵部卿の宮が訪ねておいでになったのであった。ひどく衣服を濡ぬらしてはいつておいでになった。妻戸をおたたきになる音に、宮でおありになろうことを想像した薫は、蔭かげになつたほうの室へひそかにはいつていた。まだ女王の忌いみの日が残っているのであるが、心がかりに堪えぬように思召して、一晚じゅう雪に吹き迷わされになりながらここへ宮はお着きになったのである。こんな悪天候をもともあそばさなかつた御訪問であつたから、恨めしさも紛らされていつてもいいのであろうが、中の君は

逢あつてお話をする気にはなれなかつた。宮の御誠意のなさに姉を  
煩はんもん悶もんさせ続けていたころの恥ずかしかつたこと、その気持ち  
直させることもしていただけなかつたのであるから今になって真  
心をつくしてくださることになつても、もうおそい、かいがない  
と深く中の君は思うのであつて、女房のだれもが道理を説いて勸  
めた結果、ようやく物越しでお逢いすることになり、宮は今まで  
の怠りのお言いわけをあそばすのであるが、ただじつと聞き入つ  
ているばかりの中の君で、この人さえも、あるかないかのような  
心細い命の人と思われ、続いてどうかなるのではあるまいかと思  
われる気配けはいも見えるのを、宮はお悲しみになつて、今日は何事も  
犠牲にしてよいという気におなりになりお帰りにならないことに

なった。物越しなどでなく、直接に逢いたいと宮はいろいろお訴えになるのであったが、

「もう少し人ごこちがするようになっていたのでしたら」

と言ひ、女王はいなみ続けていた。

このことを薫も聞いて、中の君へ取り次がすのに都合のよい女房を呼んで、

「こちらの真心に対してあさはかにも見える態度を、初めもその後もおとりになった宮を不快にお思いになるのはもつともですが、今少し情状を酌しゃくりよう量りょうになつて、反感をお起こしにならぬ程度にお扱いになるがよろしい。今まで御経験のなかつたためにお苦しいでしようが」

などと忠告をさせた。それを聞いた中の君は薫の思うことも恥  
ずかしくて、いよいよ宮のお話にお答えを申し上げる気になれな  
くなった。

「あなたはどうしてこんなに気が強いのでしょうか。前にあんなに  
私の心持ちも、周囲の事情もお話ししておいたではありませんか。  
それを皆お忘れになったのですか」

とお言いになり、宮は一日をお歎き暮らしになった。夜になる  
と、いっそう天気が悪くなり、ますます吹きつゝのる風の音を聞きな  
がら、寂しい旅寝の床に歎き続けておいでになるのもさすがにお  
いたましく思われて、女王はまた物越しでお話を聞くことにした。  
無数の神を証あかしに立てて、今からの変わりない愛をお語りになるの

を、女王は、どうしてこんなに女へお言いになることに馴なれておいでになるのであろうといやな気もするのであるが、遠く離れていてうとましく思うのとは違つて、すぐれた御容姿の方が、自分のために悲しんでおいでになるのを見ては、心も動かずにはいないのであつた。ただ聞くばかりであつたが、

きしかたを思ひいづるもはかなきを行く末かけて何頼むらんと、はじめてほのかな声で言った。なお飽き足らず思召す宮であつた。

「行く末を短きものと思ひなば目の前にだにそむかざらなん

すべてはかない人生にいて、人をお憎みになるような罪はお作りにならないがいいでしょう」

ともお言いになり、いろいろとおなだめになったが、

「私は気分もよろしくないのでございますから」

中の君はこう言つて奥へはいつてしまった。人目も恥ずかしいように思召し、そのまま歎息を続けて宮は夜をお明かしになった。女の恨むのも道理なほどの途絶えを作つたのは自分であるが、あまりに無情な扱い方であると恨めしい涙の落ちてきた時に、ましてそのころの彼女はどれほどに煩悶はんもんして涙の寒さを感じたこと



であろうと、お思われになつて、これが過去をお顧みさせることになつた。

中納言が主人がたの座敷に住んでいて、どの女房をも気安いふうに呼び使い、みずから指図さしずをしながら宮へ朝ちようさん餐さんを差し上げたりさせるのを御覧になつて、恋人を失つたあとのこの人の生活を気の毒にもお思ひになり、趣のあることとも御覧になつた。顔色もひどく青白くなり、瘦やせてぼんやりとしたところも見えるほど物思ひにやつれているふうも心苦しく宮は思召して、真心から御慰問の言葉をお告げになつた。恋人の死の前後の悲しい心の動揺を今さら言いだしても効かいのないことではあるが、だれよりもこの方に聞いていただきたい自分であることを薫は知りながら、言

いだせば自分の弱さがあらわになり、一つのことを思いつめる頑が固男んことお思われることがはばかられて、言葉少なにしていた。日々泣き暮らしている人であつたから、顔変わりがしたのも見苦しくはなくて、いよいよ清楚せいそで艶えんなのを宮は御覧になり、女であれば、たとえ中の君などでも必ずこの人に心が移るであろうと、御自身の多情なお心からそんな想像もされるようになった宮は、なんとなくその点がお氣がかりになり、どうかしてはるかな途みちを通い歩くという譏そしりも避け、中の君の恨みを除かせもするために京へ移したいとお思ひになるようになった。

こんなふううに恋人の心は容易に打ち解けるとは見えないし、今一日をここにこゝにいることは御所でも悪く思おぼしめ召すことであらうこと

もお心に上るのであったから、宮はお帰りになろうとした。

真心を尽くして恋人の心を動かそうと宮はお努めになったのであるが、相手の冷淡であることは苦しいものであると、この一点をお思い知らせようとして、この朝も何の言葉も送らずに中の君は宮をお帰ししたのであった。

年末になればこうした山里でなくても晴れる日は少ないのであるから、まして宇治は荒れ日びより和でない日もなく雪が降り積もる中に、物思いをしながらも暮らしている薫は、いつまでも続く夢を見ているようであった。総あげまき角の姫君の四十九日の法会も盛んに薫の手で行なわれた。

このまま新年までも閉じこもっていることはできぬ、御母宮を

初めとして自分を長くお待ちになつてゐる所々があるのであるからと思ひ、いよいよ引き上げようとする薫はまた新たな深い悲しみを覚えた。ずつとこの人が来て住んでいたために、出入りする人の多かつた忌中に続いた生活が跡かたもなく消えていくことを寂しがる人々は、姫君の死の当時にもまさつて悲しがつた。以前間をおいて訪ねて来たところの交情にもまさり、長く居ついていた忌中に仕え馴れた薫の情味の深さ、精神的なことから物質的なことにまで及ぶ思いやりの多いこの人を今日かぎりを送り出すのかと女房たちは歎きにおぼれていた。

兵部卿の宮からは、

お話ししたように、そちらへ出向くことにいろいろ困難なこと

があるため、私は心を苦しめておりましたが、ようやくあなたを近日京へ迎える方法が見つかりました。

というお手紙が中の君へあつた。

ちゅうぐう

によおう

中宮が宇治の女王との関係をお知りになつて、その姉君であつた恋人を失つた中納言もあれほどの悲しみを見せていることを思うと、並み並みの情人としてはだれも思われなすぐれた女性なのであろうと、兵部卿の宮のお心持ちに御同情をあそばして、二条の院の西の対へ迎えて時々通うようにとそつと仰せがあつたのである。女によいち一みやの宮に高貴な侍女をお付けになりたいと思召す心から、それに擬しておいでになるのではあるまいかと兵部卿の宮はお思いになりながらも、近くへその人を置いて、常にお

逢いになることのできるのはうれしいことであると思召して、この話を薫にもあそばされた。三条の宮を落成させて大姫君を迎えようとしていた自分であるが、その人の形見にせめてわが家の人にしておきたかった中の君であつたと、このことでまた心細くなる気もする薫であつた。宮の疑つておいでになるような感情はまったく捨てて、その人の保護者は自分のほかにないと、兄めいた義務感を持っているのであつた。

# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年5月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 源氏物語

総角

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>